

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成27年6月26日

【事業年度】 第114期(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

【会社名】 株式会社宮崎太陽銀行

【英訳名】 The Miyazaki Taiyo Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 取締役頭取 川崎 新一

【本店の所在の場所】 宮崎市広島2丁目1番31号

【電話番号】 (代表)(0985)24-2111

【事務連絡者氏名】 経営企画部長 安藤 和慶

【最寄りの連絡場所】 宮崎市広島2丁目1番31号

【電話番号】 (代表)(0985)24-2111

【事務連絡者氏名】 経営企画部長 安藤 和慶

【縦覧に供する場所】 株式会社宮崎太陽銀行鹿児島支店  
(鹿児島市加治屋町14番8号)  
証券会員制法人福岡証券取引所  
(福岡市中央区天神2丁目14番2号)

## 第一部 【企業情報】

## 第1 【企業の概況】

## 1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
		(自平成22年 4月1日 至平成23年 3月31日)	(自平成23年 4月1日 至平成24年 3月31日)	(自平成24年 4月1日 至平成25年 3月31日)	(自平成25年 4月1日 至平成26年 3月31日)	(自平成26年 4月1日 至平成27年 3月31日)
連結経常収益	百万円	15,531	15,963	15,058	15,104	15,839
連結経常利益	百万円	1,611	2,759	1,933	2,228	3,098
連結当期純利益	百万円	1,088	1,640	1,063	2,424	1,983
連結包括利益	百万円	387	1,811	6,694	3,506	7,770
連結純資産額	百万円	25,893	27,461	33,691	36,876	44,293
連結総資産額	百万円	581,117	590,741	606,317	618,824	645,013
1株当たり純資産額	円	231.08	258.75	374.03	431.80	569.64
1株当たり当期純利益金額	円	16.48	27.15	16.32	42.19	34.00
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	円	10.13	14.29	9.33	20.12	16.37
自己資本比率	%	4.36	4.54	5.43	5.82	6.71
連結自己資本利益率	%	4.28	6.28	3.55	7.02	5.0
連結株価収益率	倍	14.44	7.73	13.17	4.50	5.58
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	3,399	6,107	11,263	28,357	33,587
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	10,243	6,330	11,128	4,579	156
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	376	474	463	2,458	448
現金及び現金同等物 の期末残高	百万円	9,494	9,243	8,644	29,963	63,261
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	700 [172]	685 [179]	672 [173]	668 [165]	654 [177]

- (注) 1. 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2. 「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益金額」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」(以下、「1株当たり情報」という。)の算定にあたっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
- また、これら1株当たり情報の算定上の基礎は、「第5 経理の状況」中、1「(1) 連結財務諸表」の「1株当たり情報」に記載しております。
3. 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末少数株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。

## (2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第110期	第111期	第112期	第113期	第114期
決算年月		平成23年3月	平成24年3月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月
経常収益	百万円	13,478	13,816	12,703	12,834	13,592
経常利益	百万円	1,486	2,574	1,822	2,032	2,933
当期純利益	百万円	1,086	1,644	1,136	2,416	1,965
資本金	百万円	12,252	12,252	12,252	12,252	12,252
発行済株式総数	千株	普通株式 53,424 A種優先株式 26,000	普通株式 53,424 A種優先株式 26,000	普通株式 53,424 A種優先株式 26,000	普通株式 53,424 A種優先株式 26,000	普通株式 53,424 A種優先株式 26,000
純資産額	百万円	25,259	26,723	32,915	35,842	42,177
総資産額	百万円	579,975	589,061	604,801	617,174	641,945
預金残高	百万円	545,468	552,377	559,540	575,497	591,736
貸出金残高	百万円	415,156	424,948	439,361	447,564	453,002
有価証券残高	百万円	111,464	102,654	105,340	107,241	114,842
1株当たり純資産額	円	228.69	256.43	373.06	428.36	547.80
1株当たり配当額 (内1株当たり 中間配当額)	円 (円)	普通株式 5.00 (2.50) A種優先株式 8.16 (4.08)	普通株式 5.00 (2.50) A種優先株式 7.60 (3.80)	普通株式 5.00 (2.50) A種優先株式 7.55 (3.775)	普通株式 5.00 (2.50) A種優先株式 7.05 (3.525)	普通株式 5.00 (2.50) A種優先株式 6.85 (3.425)
1株当たり当期純利益 金額	円	16.45	27.22	17.69	42.03	33.66
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 金額	円	10.12	14.33	9.97	20.05	16.22
自己資本比率	%	4.35	4.53	5.44	5.80	6.57
自己資本利益率	%	4.29	6.32	3.81	7.02	5.03
株価収益率	倍	14.46	7.71	12.15	4.51	5.64
配当性向	%	30.38	18.36	28.26	11.89	14.85
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	669 [154]	652 [162]	640 [157]	635 [154]	619 [167]

(注) 1. 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2. 第114期(平成27年3月)中間配当についての取締役会決議は平成26年11月11日に行いました。

3. 「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益金額」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」の算定にあたっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。

4. 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。

## 2【沿革】

昭和16年8月	宮崎県内4無尽会社(日向、日州、高鍋、昭明)が合併し宮崎無尽株式会社設立
昭和26年10月	相互銀行業の制度施行に伴い商号を株式会社宮崎相互銀行に変更
昭和38年11月	弥生商事株式会社(現・株式会社宮崎太陽リース、現・連結子会社)設立
昭和39年5月	日本銀行当座取引開始
昭和48年2月	事務センター設置
昭和52年10月	相銀九州共同オンラインセンターによるオンライン稼働
昭和54年2月	全銀データシステム加盟
昭和59年11月	第二次オンライン稼働
昭和61年2月	宮崎相銀ビジネスサービス株式会社(現・株式会社宮崎太陽ビジネスサービス、現在清算中)設立
昭和62年6月	公共債ディーリング業務開始
昭和63年10月	外国為替業務開始
平成元年2月	普通銀行への転換に伴い商号を株式会社宮崎太陽銀行に変更
平成2年12月	現金自動支払機(CD)の日曜稼働(サンデーバンキング)開始
平成2年12月	当行株式を福岡証券取引所に上場と同時に公募増資、資本金3,232百万円となる
平成3年2月	金融機関各業態間提携による全国CDキャッシュサービス(MICS)取扱い開始
平成4年7月	担保附社債信託法に基づく担保附社債の受託業務開始
平成5年10月	日向市信用組合と合併
平成7年5月	第三次オンライン稼働
平成8年9月	株式会社宮崎太陽キャピタル(現・連結子会社)設立
平成10年12月	証券投資信託の窓口販売業務開始
平成13年2月	第三者割当増資により資本金5,752百万円となる
平成15年7月	新本店を現在地に新築移転
平成22年3月	第三者割当方式によるA種優先株式130億円発行

### 3 【事業の内容】

当行及び当行の関係会社は、当行、(連結)子会社3社等で構成され、銀行業務を中心に、リース・保証等事業及びその他の金融サービスに係る事業を行っております。

当行及び当行の関係会社の事業に係わる位置づけは次のとおりであります。なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

#### (銀行業)

当行の本店ほか支店51ヶ店においては、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務、その他附帯業務を行っております。

#### (リース・保証等事業)

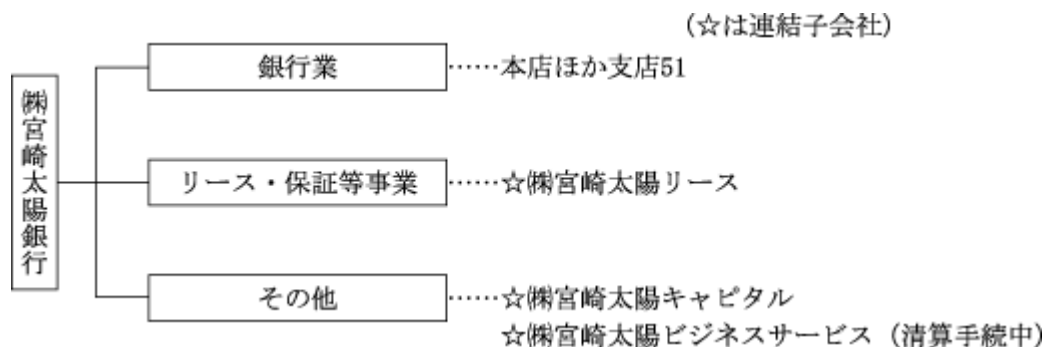
連結子会社の株式会社宮崎太陽リースにおいては、総合リース業務及び個人ローン等の保証等業務を行っております。

#### (その他)

連結子会社の株式会社宮崎太陽ビジネスサービスにおいては、当行の委託による現金等の計算・整理・集配金等の業務を行っております。なお、同社は、平成27年3月31日に解散し、現在、清算手続中であります。

連結子会社の株式会社宮崎太陽キャピタルにおいては、ベンチャーキャピタル業務を行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



## 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(又は 被所有) 割合(%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(連結子会社) 株式会社宮崎太陽 ビジネスサービス	宮崎県 宮崎市	10	その他	100.00 ( ) { }	3 (3)		業務委 託	提出会 社の建 物一部 貸借	
株式会社宮崎太陽 リース	宮崎県 宮崎市	15	リース・ 保証等事業	5.00 ( ) { 54.00 }	2 (2)		資金の 貸出・ リース 料の支 払	提出会 社の土 地一部 貸借	
株式会社宮崎太陽 キャピタル	宮崎県 宮崎市	10	その他	55.00 (50.00) { }	2 (2)		業務委 託	提出会 社の建 物一部 貸借	

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。  
2. 上記関係会社のうち、特定子会社に該当するものではありません。  
3. 上記関係会社のうち、有価証券報告書を提出している会社はありません。  
4. 「議決権の所有(又は被所有)割合」欄の( )内は子会社による間接所有の割合(内書き)、{ }内は、「自己と出資、人事、資金、技術、取引等において緊密な関係にあることにより自己の意思と同一の内容の議決権を行使すると認められる者」又は「自己の意思と同一の内容の議決権を行使することに同意している者」による所有割合(外書き)であります。  
5. 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の( )内は、当行の役員(内書き)であります。  
6. 株式会社宮崎太陽ビジネスサービスは、平成27年3月31日に解散し、現在、清算手続中であります。  
7. 株式会社宮崎太陽リースについては、経常収益(連結会社相互間の内部経常収益を除く)の連結経常収益に占める割合が10/100を超えております。

株式会社宮崎太陽リースの主要な損益情報等	経常収益	2,392百万円
	経常利益	163百万円
	当期純利益	109百万円
	純資産額	1,008百万円
	総資産額	5,680百万円

## 5 【従業員の状況】

## (1) 連結会社における従業員数

平成27年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業	リース・保証等事業	その他	合計
従業員数(人)	619 [167]	11 [2]	24 [8]	654 [177]

- (注) 1. 従業員数は、嘱託、契約社員及び臨時従業員 192人を含んでおりません。  
2. 臨時従業員数は、[ ]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

## (2) 当行の従業員数

平成27年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
619 [167]	37.1	15.0	4,855

- (注) 1. 従業員数は、嘱託、契約社員及び臨時従業員 181人を含んでおりません。  
2. 当行の従業員はすべて銀行業のセグメントに属しております。  
3. 臨時従業員数は、[ ]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。  
4. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。  
5. 当行の従業員組合は、宮崎太陽銀行従業員組合と称し、組合員数は 485人であります。労使間においては特記すべき事項はありません。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【業績等の概要】

#### 業績

当期における国内経済は、消費税率引き上げに伴う駆け込み需要の反動により個人消費が一時的に落ち込んだものの、政府による経済政策や日本銀行の金融緩和を背景とした円安・株高が進行し、企業収益や雇用・所得環境にも改善の動きが見られるなど、景気は緩やかな回復基調で推移しました。

この間、日本銀行は、2%の「物価安定の目標」の実現と安定的な持続を目指して追加の金融緩和を実施したほか、金融機関の一段と積極的な行動や企業・家計の前向きな資金需要の増加を一層促す観点から「貸出増加及び成長基盤強化を支援するための資金供給」の期限を1年延長しました。

また、政府は、昨年12月に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定して地方創生に関する多様な支援を打ち出し、金融等による「地域企業応援パッケージ」として事業性評価を重視した融資や顧客企業の経営改善・生産性向上等への支援強化などを地域金融機関に促しております。

当行の営業管内につきましては、個人消費の一部に弱い動きが見られるものの、企業の生産拡大や雇用環境の着実な改善を背景として緩やかな持ち直しの動きが続いており、今後も各種政策の効果等により景気回復へ向かうことが期待されております。

このような情勢のもとで、当行企業集団は地域金融機関を中心とするグループとしてお客様第一主義の営業展開と業績向上に努めるとともに、資産内容の一層の健全化を進めた結果、当連結会計年度の業績は次のとおりとなりました。

#### (経営成績)

##### 経常収益

国債等債券売却益の減少を主因にその他業務収益は減少したものの、有価証券利息配当金の増加を主因に資金運用収益が増加したほか、株式等売却益の増加を主因にその他経常収益が増加したことから、経常収益は前連結会計年度比 7億35百万円(4.9%)増収の 158億39百万円となりました。

##### 経常費用

消費者ローンの増加に伴い支払保証料が増加したことで役員取引費用は増加したものの、貸倒引当金繰入額の減少を主因にその他経常費用が減少したことから、経常費用は前連結会計年度比 1億36百万円(1.1%)減少の 127億40百万円となりました。

##### 経常利益、当期純利益

上記の結果、当連結会計年度の経常利益は前連結会計年度比 8億70百万円(39.0%)増益の 30億98百万円となりました。また、当期純利益は前連結会計年度比 4億41百万円(18.2%)減益の 19億83百万円となりました。

#### (財政状態)

##### 預金

当連結会計年度末は、個人預金の増加を主因に、前連結会計年度末比 162億円(2.8%)増加の 5,916億円となりました。

##### 貸出金

当連結会計年度末は、消費者ローンを含む中小企業等向け貸出の増加を主因に、前連結会計年度末比 54億円(1.2%)増加し、期末残高は 4,491億円となりました。

##### 有価証券

当連結会計年度末は、株式や外国証券のほか投資信託等の運用増を主因に、前連結会計年度末比 76億円(7.1%)増加し、期末残高は 1,148億円となりました。

## セグメントの業績

### 銀行業

経常収益は、外部顧客に対する経常収益の増加を主因に、135億92百万円となりました。一方、経常費用は106億58百万円となりました。この結果、セグメント利益は29億33百万円となりました。

### リース・保証等事業

経常収益は、外部顧客に対する経常収益の減少を主因に、23億92百万円となりました。一方、経常費用は22億28百万円となりました。この結果、セグメント利益は1億63百万円となりました。

## キャッシュ・フローの状況

現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、前連結会計年度末比 332億97百万円増加して 632億61百万円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フローは、貸出金の増加があったものの、預金の増加やコールローンの減少を主因に、335億87百万円の収入超となりました。これを前連結会計年度と比較しますと、52億30百万円の収入増となります。

投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得による支出が売却や償還による収入とほぼ同程度であったことから、1億56百万円とわずかながら収入超となりました。これを前連結会計年度と比較しますと、47億35百万円の収入増となります。

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払を主因に、4億48百万円の支出超となりました。これを前連結会計年度と比較しますと、20億10百万円の支出減となります。



(1) 国内業務部門・国際業務部門別収支

当連結会計年度の業務収支は全体で 107億27百万円となりました。その内訳は資金運用収支が 102億23百万円、役務取引等収支が 3億34百万円、その他業務収支が 1億69百万円となっております。

このうち主となる資金運用収支では、貸出金利息を中心とする資金運用収益は 105億30百万円(うち国内業務部門 104億44百万円)、預金利息を中心とする資金調達費用は 3億7百万円(うち国内業務部門 3億6百万円)となっております。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	9,813	141		9,955
	当連結会計年度	10,138	85		10,223
うち資金運用収益	前連結会計年度	10,188	146	3	10,331
	当連結会計年度	10,444	90	4	10,530
うち資金調達費用	前連結会計年度	375	4	3	376
	当連結会計年度	306	5	4	307
役務取引等収支	前連結会計年度	530	1		532
	当連結会計年度	332	2		334
うち役務取引等収益	前連結会計年度	1,899	4		1,903
	当連結会計年度	1,906	4		1,910
うち役務取引等費用	前連結会計年度	1,368	2		1,370
	当連結会計年度	1,573	1		1,575
その他業務収支	前連結会計年度	189	11		201
	当連結会計年度	165	4		169
うちその他業務収益	前連結会計年度	2,366	11		2,378
	当連結会計年度	2,320	4		2,324
うちその他業務費用	前連結会計年度	2,176			2,176
	当連結会計年度	2,155			2,155

- (注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。
2. 国内業務部門とは当行及び子会社の円建取引であります。
3. 国際業務部門とは当行の外貨建取引であります。
4. 相殺消去額は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。

(2) 国内業務部門・国際業務部門別資金運用/調達の状況

当連結会計年度の連結相殺消去後の資金運用勘定の平均残高は 5,836億88百万円(うち貸出金が 4,354億15百万円)となり、同様に資金運用勘定利息は 105億30百万円(うち貸出金利息 87億33百万円)を計上いたしました。資金運用勘定利回りが 1.80%(貸出金利回り 2.00%)となっております。

資金調達勘定の平均残高は 5,732億96百万円(うち預金が 5,730億58百万円)となり、資金調達勘定利息も同様に 3億7百万円(うち預金利息が 3億4百万円)を計上いたしました。資金調達勘定利回りが 0.05%(預金利回り 0.05%)となっております。

なお、本資料は国内部門と国際部門別にそれぞれ開示しております。

国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	(7,044) 562,220	(3) 10,188	1.81
	当連結会計年度	(9,128) 583,539	(4) 10,444	1.79
うち貸出金	前連結会計年度	419,267	8,798	2.09
	当連結会計年度	435,415	8,733	2.00
うち商品有価証券	前連結会計年度	6		
	当連結会計年度	5	0	0.22
うち有価証券	前連結会計年度	91,529	1,337	1.46
	当連結会計年度	93,565	1,661	1.77
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	43,633	48	0.11
	当連結会計年度	16,537	19	0.11
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	714	0	0.08
	当連結会計年度	28,886	25	0.08
資金調達勘定	前連結会計年度	554,337	375	0.06
	当連結会計年度	572,841	306	0.05
うち預金	前連結会計年度	552,359	311	0.05
	当連結会計年度	572,607	303	0.05
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	8	0	0.11
	当連結会計年度	2	0	0.10
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコマース・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	1,030	31	3.07
	当連結会計年度	223	2	1.32

- (注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。
2. 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、子会社については、毎月末毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
3. 国内業務部門とは当行の国内部門及び子会社であります。
4. ( )内は、当行の国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

## 国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	7,272	146	2.02
	当連結会計年度	9,276	90	0.97
うち貸出金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち商品有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち有価証券	前連結会計年度	7,077	146	2.06
	当連結会計年度	9,267	90	0.97
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	114	0	0.77
	当連結会計年度	78	0	0.71
資金調達勘定	前連結会計年度	(7,044) 7,753	(3) 4	0.06
	当連結会計年度	(9,128) 9,583	(4) 5	0.05
うち預金	前連結会計年度	708	0	0.13
	当連結会計年度	451	0	0.16
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコマーシャル・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			

- (注) 1. 平均残高は、日々の残高の平均に基づいて算出しております。  
2. 国際業務部門とは当行の国際部門であります。  
3. ( )内は、当行の国内業務部門と国際業務部門間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。  
4. 国際業務部門の国内店外貸建取引の平均残高は月次カレント方式(前月末TT仲値を当該月のノンエクス  
チェンジ取引に適用する方式)により算出しております。

## 合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 ( )	合計	小計	相殺 消去額 ( )	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	569,493	7,044	562,449	10,335	3	10,331	1.83
	当連結会計年度	592,816	9,128	583,688	10,535	4	10,530	1.80
うち貸出金	前連結会計年度	419,267		419,267	8,798		8,798	2.09
	当連結会計年度	435,415		435,415	8,733		8,733	2.00
うち商品有価証券	前連結会計年度	6		6				
	当連結会計年度	5		5	0		0	0.22
うち有価証券	前連結会計年度	98,607		98,607	1,483		1,483	1.50
	当連結会計年度	102,832		102,832	1,751		1,751	1.70
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	43,633		43,633	48		48	0.11
	当連結会計年度	16,537		16,537	19		19	0.11
うち買現先勘定	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち預け金	前連結会計年度	829		829	1		1	0.17
	当連結会計年度	28,964		28,964	26		26	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	562,091	7,044	555,046	380	3	376	0.06
	当連結会計年度	582,425	9,128	573,296	312	4	307	0.05
うち預金	前連結会計年度	553,067		553,067	312		312	0.05
	当連結会計年度	573,058		573,058	304		304	0.05
うち譲渡性預金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	8		8	0		0	0.11
	当連結会計年度	2		2	0		0	0.10
うち売現先勘定	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち コマーシャル・ ペーパー	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち借入金	前連結会計年度	1,030		1,030	31		31	3.07
	当連結会計年度	223		223	2		2	1.32

(注) 1. 相殺消去額は、当行の国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息であります。

## (3) 国内業務部門・国際業務部門別役務取引の状況

当連結会計年度の役務取引等収益は国内業務部門の預金・貸出業務、為替業務を中心に 19億10百万円となりました。

一方、役務取引等費用は保証業務を中心に 15億75百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	1,899	4		1,903
	当連結会計年度	1,906	4		1,910
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	1,229			1,229
	当連結会計年度	1,270			1,270
うち為替業務	前連結会計年度	595	4		599
	当連結会計年度	575	4		579
うち証券関連業務	前連結会計年度	12			12
	当連結会計年度	6			6
うち代理業務	前連結会計年度	25			25
	当連結会計年度	24			24
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	8			8
	当連結会計年度	8			8
うち保証業務	前連結会計年度	27			27
	当連結会計年度	21			21
役務取引等費用	前連結会計年度	1,368	2		1,370
	当連結会計年度	1,573	1		1,575
うち為替業務	前連結会計年度	134	2		137
	当連結会計年度	140	1		142
うち保証業務	前連結会計年度	1,102			1,102
	当連結会計年度	1,304			1,304

(注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。

2. 国内業務部門とは当行の国内部門及び子会社であります。

3. 国際業務部門とは当行の国際部門であります。

## (4) 国内業務部門・国際業務部門別預金残高の状況

## 預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	559,637	15,771		575,408
	当連結会計年度	576,319	15,340		591,660
うち流動性預金	前連結会計年度	272,136			272,136
	当連結会計年度	281,238			281,238
うち定期性預金	前連結会計年度	283,455			283,455
	当連結会計年度	290,521			290,521
うちその他	前連結会計年度	4,045	15,771		19,816
	当連結会計年度	4,559	15,340		19,900
譲渡性預金	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
総合計	前連結会計年度	559,637	15,771		575,408
	当連結会計年度	576,319	15,340		591,660

- (注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。
2. 国内業務部門とは当行の国内部門及び子会社であります。
3. 国際業務部門とは当行の国際部門であります。
4. 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金
5. 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

## (5) 国内業務部門・国際業務部門別貸出金残高の状況

## 業種別貸出状況(末残・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内 (除く特別国際金融取引勘定分)	443,675	100.00	449,117	100.00
製造業	20,162	4.54	18,586	4.14
農業, 林業	3,537	0.80	3,694	0.82
漁業	2,379	0.54	2,490	0.56
鉱業, 採石業, 砂利採取業	296	0.07	342	0.08
建設業	19,023	4.29	16,298	3.63
電気・ガス・熱供給・水道業	6,712	1.51	12,197	2.72
情報通信業	1,516	0.34	1,181	0.26
運輸業, 郵便業	8,660	1.95	8,257	1.84
卸売業, 小売業	35,229	7.94	32,603	7.26
金融業, 保険業	29,908	6.74	32,891	7.32
不動産業, 物品賃貸業	74,113	16.70	74,525	16.59
各種サービス業	67,908	15.31	68,032	15.15
地方公共団体	58,281	13.14	58,044	12.92
その他	115,945	26.13	119,971	26.71
海外及び特別国際金融取引勘定分				
政府等 金融機関 その他				
合計	443,675		449,117	

- (注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。
2. 国内業務部門とは当行の国内部門及び子会社であります。
3. 国際業務部門とは当行の国際部門であります。

外国政府等向け債権残高(国別)

該当事項はありません。

(6) 国内業務部門・国際業務部門別有価証券の状況

有価証券残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	45,009			45,009
	当連結会計年度	44,860			44,860
地方債	前連結会計年度	5,367			5,367
	当連結会計年度	3,963			3,963
短期社債	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
社債	前連結会計年度	27,386			27,386
	当連結会計年度	26,204			26,204
株式	前連結会計年度	14,425			14,425
	当連結会計年度	19,690			19,690
その他の証券	前連結会計年度	7,218	7,832		15,051
	当連結会計年度	10,484	9,640		20,125
合計	前連結会計年度	99,408	7,832		107,240
	当連結会計年度	105,202	9,640		114,843

- (注) 1. 当行グループの営業拠点は全て国内のみであります。従って当行の海外店及び海外に本店を有する子会社はありません。
2. 国内業務部門とは当行の国内部門及び子会社であります。
3. 国際業務部門とは当行の国際部門であります。
4. 「その他の証券」には、外国債券を含んでおります。

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号。以下、「告示」という。)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	平成27年3月31日
1. 連結自己資本比率(2/3)	9.43
2. 連結における自己資本の額	335
3. リスク・アセットの額	3,557
4. 連結総所要自己資本額	142

単体自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	平成27年3月31日
1. 自己資本比率(2/3)	9.26
2. 単体における自己資本の額	326
3. リスク・アセットの額	3,528
4. 単体総所要自己資本額	141

## (資産の査定)

## (参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

## 1. 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

## 2. 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

## 3. 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

## 4. 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

## 資産の査定額

債権の区分	平成26年3月31日	平成27年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	60	54
危険債権	62	56
要管理債権	20	36
正常債権	4,348	4,399



## 2 【生産、受注及び販売の状況】

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

## 3 【対処すべき課題】

国内経済は緩やかな回復基調が続いておりますが、地方経済は未だ本格回復するには至っておらず、金融業界を取り巻く経営環境は、人口減少・高齢化の進行に伴う地元経済の規模縮小に加え、県境を越えた地域金融機関の競争激化などによって一層厳しさを増しております。

このような中、当行が持続的に成長するための課題は「中小企業向け貸出」による収益拡大であると認識しており、従来の営業体制や行動を見直して組織的な収益力強化を図る必要があると考えております。

そのような状況にあって、当行におきましては、平成27年4月よりスタートさせた中期経営計画「地域との未来創生プラン」において、当行がお客様から選ばれ続け、地域経済を支える役割を果たすため、お取引先基盤の中核である中小企業向け貸出業務を一層強化しつつ、行員の接客スキルの品質改善等による徹底したお客様起点の営業展開と、お取引先企業の売上改善等に貢献する新しいビジネスモデルの行内外への浸透に取り組むこととしたほか、堅固な経営基盤確立のための構造改革にも着手することで、当行の「成長のコア（＝収益の多様化）」の再構築を進めながら、持続的な成長を目指すとともに、法令等遵守の一層の徹底とさらなる効率経営、財務体質の強化に努め、地域とともに発展できるよう、役職員一同全力を尽くしてまいり所存でございます。

## 4 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループ(当行及び連結子会社)が判断したものであります。

銀行経営は、グローバルに進展する市場経済社会の中で「自己責任原則」に徹することが強く求められており、セルフコントロール体制としてのリスク管理の意義は極めて大きくなっております。こうした状況下、銀行に課せられた高度な公共的使命と社会的責任の重みを認識し、企業倫理に裏打ちされた健全な業務運営を通じて、揺るぎない信頼の確立を図ることが重要であります。

当行は、リスク管理を経営の最重要課題の一つと位置づけ、「リスク管理に関する基本理念」、「リスク管理に関する基本方針」を定め、「リスク管理委員会」を設置するとともに、全行的なリスク管理の統括部門を経営企画部 リスク管理グループに置き、リスク管理態勢の整備・充実を図っております。

また、災害やシステム障害等の危機発生時の基本方針として、「危機管理指針」を定めるとともに、主要業務継続及び早期復旧を目的とした業務継続計画（BCP）を策定して、適切な管理体制を整備・強化しております。

### (1) 信用リスク

信用リスクとは、信用供与先の財務内容の悪化等により、資産(オフバランス資産を含む)の価値が減少ないし消失し、当行が損失を被るリスクをいいます。

信用リスク管理は、与信取引に関する信用リスクを正確に把握・評価し、自己責任原則に基づくリスク管理を適切に行うことにより、当行資産の健全性をより高める事を目的とします。

当行では特に貸出金における不良債権処理については、重要な経営課題として認識し、従来より積極的に処理を行ってきました。その効果もあり、資産の健全化については十分為し得たものと判断しておりますが、今後営業圏内の景気の動向によっては、正常先・要注意先債権からの不良債権化に加えて担保評価額の下落等が発生することも予想され、当行の業績と財務状況に悪影響を及ぼす可能性が生じることになります。

(2) 流動性リスク

流動性リスク管理は、当行の資金運用・調達構造に即した適切かつ安定的な資金繰りを行い、万一、不測の事態が発生した場合でも合理的かつ機動的に対応できる体制を整えておくことを目的とします。

市場からの調達については限界があることを認識し、不測のリスクに備え常に一定の資金を手元に確保しておくよう努めます。また、常時資金ポジションの把握に努め、資金繰りの予測ができるようにしておりますが、当行が現在想定している以上の事態が発生した場合(例えば他金融機関の風評によるシステミックリスク等)は、当行の財務状況・資金繰りに悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 市場関連リスク

市場関連リスク管理は、収益確保及び収益力強化のため、市場取引に係るリスクを正確に把握し、これを適切にコントロールできる体制を整えることを目的とします。

市場取引においては、当行の実態にあった適切なリスク管理体制の構築・改善に努めるものとしております。特に有価証券については、1 流動性の確保、2 安全性の確保、3 収益性の確保の3原則を準拠しつつ運用を行っております。しかしながら、今後当行が現在想定している以上の金利の上昇及び株価の下落が発生した場合、含み損が増加しかつ相応の有価証券評価損が発生することで、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 事務リスク

事務リスク管理は、事務体制を整備することで事務レベルの向上を図り、もって金融機関として期待される事務処理の正確性を実現し、お客様の当行に対する支持・信頼を高めることを目的とします。

全ての業務に事務リスクが存在していること、そして、事務リスクを軽減することの重要性を認識し、常に事務リスクの軽減を図るため適切な方策を講じることとしておりますが、当行が想定している以上のリスクが発生した場合、当行の財務状況・経営内容に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) システムリスクと情報セキュリティ

システムリスクとは、コンピュータシステムのダウン又は誤作動等、システムの不備等に伴い当行が被るリスク、さらにコンピュータが不正に使用されることにより被るリスクであります。

システムリスク管理は、システム全般に関するリスクを的確に認識・把握し、適切なリスク管理を行うことにより、トラブル・事故・不祥事・苦情及びそれらに係る損失等を未然に防止することを目的とします。

また、当行が継続的・安定的に経営を行っていく上で、情報は重要な資産であり、銀行の情報資産に対し適切な安全対策を実施することは、銀行業務を遂行するための信頼性を確保する重要な案件です。

当行の全ての役職員は、この重要な経営資源である情報資産の重要性を認識し、情報資産の機密性・完全性の確保に努めなければなりません。

当行では、情報資産の保護並びに保護の維持向上を目的として「情報セキュリティ管理委員会」を設置し、セキュリティポリシーの遵守やそれに係る諸施策の実施状況について検証を行うなど、常にセキュリティの堅牢性を維持、向上させることに注力しておりますが、現在想定している以上のリスクが発生した場合、当行の財務状況・経営内容に悪影響を及ぼす可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

該当事項はありません。

## 7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループ(当行及び連結子会社)が判断したものであります。

当行グループは、当行及び連結子会社3社であります。銀行業が主であるため、当事業年度における主要な財政状態及び経営成績に関し、当行単体について分析いたしますと以下のとおりであります。

### (1) 財政状態の分析

#### 預金・貸出金残高

当事業年度の預金は、年度平残 5,731億円で前事業年度比 200億円(3.6%)の増加となりました。これは、個人預金が前事業年度比 118億円(2.8%)増加したほか、法人預金が同比 60億円(5.4%)増加したことによるものであります。

一方、貸出金は、事業性貸出及び消費者ローンともに増加したことで、年度平残 4,393億円となり、前事業年度比 163億円(3.8%)の増加となりました。

一方、貸出金年度末残も、前事業年度末比 55億円(1.2%)増加し、4,530億円となりました。

		前事業年度 (A)	当事業年度 (B)	増減 (B) - (A)
預金(年度平残)	(億円)	5,531	5,731	200
うち個人預金	(億円)	4,143	4,261	118
うち法人預金	(億円)	1,093	1,153	60
うち公金預金	(億円)	285	306	21
うち金融機関預金	(億円)	10	9	1
貸出金(年度平残)	(億円)	4,230	4,393	163
貸出金(年度末残)	(億円)	4,475	4,530	55
部分直接償却額	(億円)	106	107	1
うち事業性貸出	(億円)	3,196	3,214	18
うち消費者ローン	(億円)	1,279	1,315	36

#### 金融再生法開示債権残高

当事業年度末の金融再生法開示債権残高は、前事業年度末に比べ危険債権及び破産更生債権等が減少したものの、要管理債権が増加したことで、2億44百万円増加して144億96百万円となりました。

その結果、金融再生法開示債権の総与信に占める割合は前事業年度末に比べ、0.02ポイント上昇して3.19%となりました。

		前事業年度 (A)	当事業年度 (B)	増減 (B) - (A)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	(百万円)	6,009	5,353	656
危険債権	(百万円)	6,219	5,553	666
要管理債権	(百万円)	2,023	3,589	1,566
小計	(百万円)	14,252	14,496	244
合計に占める割合	(%)	3.17	3.19	0.02
正常債権	(百万円)	434,759	439,855	5,096
合計	(百万円)	449,012	454,352	5,340

自己資本比率(国内基準)

自己資本比率は9.26%と、国内基準の最低自己資本比率である4.0%を上回っております。

		前事業年度 (A)	当事業年度 (B)	増減 (B) - (A)
自己資本額	(百万円)	31,492	32,691	1,199
リスク・アセット等	(百万円)	345,925	352,837	6,912
自己資本比率	(%)	9.10	9.26	0.16

(注) 自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は国内基準を採用しております。

#### 繰延税金資産

当事業年度末の税効果会計に基づく繰延税金資産の計上額は、将来減算一時差異による繰延税金資産の額を、その他有価証券評価差額等による繰延税金負債の額が上回り、繰延税金負債の純額計上となっております。

## (2) 経営成績の分析

### 資金利益

貸出金利回りは前事業年度比0.10ポイント低下して1.99%となり、預金等利回りは前事業年度と同じ0.05%となりましたが、有価証券利回りが同0.19ポイント上昇したことで、当事業年度の資金利益は、前事業年度比2億49百万円増益の102億49百万円となりました。翌事業年度の金利動向については、引き続き利回りの低下が予想される中、貸出金の一層の増加を推進することで資金利益の増強に注力していく計画であります。

### 役務利益

投資信託や保険などの販売は好調であったものの、消費者ローン残高の増加に伴う支払保証料の増加により、当事業年度の役務取引等利益は前事業年度比 1億89百万円減益の3億3百万円となりました。今後も主に保険商品の販売を推進し、預り資産手数料の増収による役務取引等利益を計上してまいります。

### その他業務利益

国債等債券償却が32百万円増加したことを主因に、その他業務利益は前事業年度比31百万円減益の11百万円となりました。今後もリスク管理に注力しつつ、国債等債券の効率的運用を図ってまいります。

### 経費

人件費は減少したものの、物件費や税金費用が増加したことで、経費全体では前事業年度比 1百万円の増加となりました。今後も、事務費を中心とした物件費の見直しを図ることで、経費全体を抑制させていく予定であります。

### 業務純益

上記の結果、一般貸倒引当金繰入前の業務純益は前事業年度比28百万円増益の27億43百万円となりました。一方で、一般貸倒引当金の繰入額が増加となったことにより、業務純益は前事業年度比3億4百万円減益の27億21百万円となりました。

### 経常収益

国債等債券売却益の減少を主因にその他業務収益は減少したものの、有価証券利息配当金の増加を主因に資金運用収益が増加したほか、株式等売却益の増加を主因にその他経常収益も増加したことから、経常収益は前事業年度比7億58百万円増収の135億92百万円となりました。

### 経常費用

消費者ローンの増加に伴い支払保証料が増加したことで役務取引費用は増加したものの、貸倒引当金繰入額の減少を主因にその他経常費用が減少したことなどにより、経常費用は前事業年度比1億44百万円減少の106億58百万円となりました。

### 経常利益

上記の結果、経常利益は前事業年度比9億1百万円増益の29億33百万円となりました。

### 当期純利益

経常利益は増益となったものの、前事業年度は退職給付信託の設定に伴い特別利益が計上されたことから、当期純利益は前事業年度比 4億51百万円減益の19億65百万円となりました。

県内経済の動向等を考慮すれば、まだまだ予断を許さない状況にありますが、翌事業年度の当期純利益は11億円程度を予想しております。

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの状況に関しては、「第2 事業の状況」中、「1 業績等の概要」の「キャッシュ・フローの状況」に記載しております。

### 第3 【設備の状況】

#### 1 【設備投資等の概要】

セグメントごとの設備投資については、次のとおりであります。

銀行業においては、当連結会計年度中に新設した店舗はありませんが、1出張所を廃止したことから、店舗数は前連結会計年度末の52ヶ店1出張所から、当連結会計年度末は52ヶ店となっています。店舗外現金自動設備(ATM)につきましては、2ヶ所を廃止し、3ヶ所を新設したため、当連結会計年度末の総設置箇所数は66箇所(共同出張所を含む)となっております。また、当連結会計年度の設備投資の総額は、113百万円となりました。

リース・保証等事業及びその他の事業においては、当連結会計年度における主要な設備投資はありません。

#### 2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

(平成27年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグ メント の名称	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
						面積 (㎡)	帳簿価額(百万円)					
当行		本店	宮崎県宮崎市	銀行業	店舗	6,344.89 ( )	1,703	2,511	35	61	4,311	132
		南支店 ほか20店	" "	銀行業	店舗	17,945.01 (2,485.70)	2,575	381	18		2,975	183
		西都支店	" 西都市	銀行業	店舗	1,360.01 ( )	58	6	0		65	11
		高鍋支店	" 児湯郡 高鍋町	銀行業	店舗	782.61 ( )	47	12	0		60	7
		国富支店	" 東諸県郡 国富町	銀行業	店舗	1,508.94 ( )	68	7	0		76	8
		都農支店	" 児湯郡 都農町	銀行業	店舗	838.83 (285.47)	14	5	0		20	8
		延岡支店 ほか3店	" 延岡市	銀行業	店舗	3,733.78 (1,422.98)	296	35	0		332	41
		高千穂支店	" 西臼杵郡 高千穂町	銀行業	店舗	231.21 (144.00)	7	21	0		29	6
		日向支店 ほか2店	" 日向市	銀行業	店舗	2,814.55 (565.06)	112	111	0		224	30
		門川支店	" 東諸県郡 門川町	銀行業	店舗	1,179.73 ( )	34	30	0		65	10

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグ メント の名称	設備の 内容	土地	建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
						面積 (㎡)					
当行		都城支店 ほか4店	宮崎県都城市	銀行業	店舗	5,848.23 (1,419.59)	402	52	1	456	52
		三股支店	" 北諸県郡 三股町	銀行業	店舗	991.93 ( )	33	13	0	47	8
		小林支店	" 小林市	銀行業	店舗	1,301.34 (103.91)	120	26	0	147	11
		油津支店 ほか1店	" 日南市	銀行業	店舗	2,118.00 ( )	120	21	0	142	16
		串間支店	" 串間市	銀行業	店舗	731.28 ( )	40	11	0	51	8
		鹿児島支店 ほか1店	鹿児島県 鹿児島市	銀行業	店舗	1,880.60 ( )	1,074	25	0	1,099	21
		鹿屋支店	" 鹿屋市	銀行業	店舗	812.76 (140.00)	63	8	0	72	10
		川内支店	" 薩摩川内市	銀行業	店舗	786.08 ( )	77	10	0	89	9
		国分支店	" 霧島市	銀行業	店舗	293.25 ( )	85	5	0	90	8
		佐伯支店	大分県佐伯市	銀行業	店舗	732.52 (150.00)	69	13	0	83	7
		福岡支店	福岡県福岡市 中央区	銀行業	店舗	595.04 ( )	267	9	0	277	8
		事務 センター	宮崎県宮崎市	銀行業	事務セ ンター	( )		355	41	397	25
		社宅・寮	宮崎県宮崎市 ほか 21か所	銀行業	社宅・ 寮・厚 生施設	14,627.04 ( )	1,449	143	0	1,593	
		その他の 施設	宮崎県宮崎市 ほか 8か所	銀行業		5,695.54 ( )	121	5	0	126	
国内 連結 子会社	(株)宮崎 太陽 リース	本社ほか	宮崎県宮崎市 ほか	リース ・保証 等事業	事務所 ほか	3,831.10 ( )	31	10	0	41	11
国内 連結 子会社	(株)宮崎 太陽ビ ジネス サービ ス		宮崎県宮崎市	その他	事務所	( )		0	0	22	
国内 連結 子会社	(株)宮崎 太陽 キャピ タル		宮崎県宮崎市	その他	事務所	( )		0	0	2	

- (注) 1. 当行の主要な設備の太宗は、店舗、事務センターであるため、銀行業に一括計上しております。
2. 土地の面積欄の( )内は、借地面積(うち書き)であり、その年間賃借料は建物も含め 154百万円であります。
3. 動産は、事務機械 65百万円、その他 35百万円であります。
4. 当行の店舗外現金自動設備 66箇所は上記に含めて記載しております。
5. 上記には、関連会社に貸与している土地、建物が含まれており、その内容は次のとおりであります。  
土地 76百万円(254.64㎡)、建物 168百万円(629.00㎡)

### 3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末において計画中的重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 新設、改修

特記すべき事項はありません。

(2) 売却

特記すべき事項はありません。

## 第4 【提出会社の状況】

### 1 【株式等の状況】

#### (1) 【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	210,000,000
優先株式	210,000,000
計	210,000,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成27年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成27年6月26日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	53,424,449	同左	福岡証券取引所	(注)2
A種優先株式(注)1	26,000,000	同左	非上場	(注)3、4
計	79,424,449	同左		

- (注) 1. A種優先株式は、企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第8項に基づく「行使価額修正条項付新株予約権付社債券等」であります。
2. 権利内容に何ら限定のない当行における標準となる株式であり、単元株式数は、1,000株であります。また、会社法第322条第2項の規定による定款の定めはありません。
3. 当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の特質等
- (1) A種優先株式は、取得価額が株価の変動による取得価額の変動により修正され、取得と引換えに交付する普通株式数が変動します。
- (2) 行使価額修正条項の内容
- 修正基準  
取得価額の修正は、取得請求期間において別途定める一定の期間の終値の平均値に相当する金額に修正されますが、下限取得価額(発行決議日からの5連続取引日における終値の平均値の50%に相当する金額)を下回る場合は、修正後取得価額は下限取得価額とされます。なお、別途定める調整事由が生じた場合は、取締役会が適当と判断する金額に調整されます。別途定める調整事由については、下記(注)4の(8) 取得価額の調整に記載のとおりであります。
- 修正頻度  
修正価額の修正は、毎月第3金曜日の翌日以降、1ヵ月1回の頻度で行います。
- (3) 当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に表示された権利行使に関する事項についての当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の所有者との間の取り決めはありません。
- (4) 当行の株券の売買に関する事項について、当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の所有者との間の取り決めはありません。
4. 単元株式数は、1,000株であり、議決権はありません。また、A種優先株式の内容は下記のとおりであり、会社法第322条第2項の規定による定款の定めはありません。
- (1) A種優先配当金  
当銀行は、定款第39条に定める剰余金の配当を行うときは、当該剰余金の配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載又は記録されたA種優先株式を有する株主(以下、「A種優先株主」という。)又はA種優先株式の登録株式質権者(以下、「A種優先登録株式質権者」という。)に対し、普通株式を有する株主(以下、「普通株主」という。)及び普通株式の登録株式質権者(以下、「普通登録株式質権者」という。)に先立ち、A種優先株式1株につき、A種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)に、下記(2)に定める配当年率(以下、「A種優先配当年率」という。)を乗じて算出した額の金銭(円位未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を切り上げる。)(以下、「A種優先配当金」という。)の配当をする。ただし、当該基準日の属する事業年度においてA種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対して第10項に定めるA種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。

(2) A種優先配当年率

平成22年3月31日に終了する事業年度に係るA種優先配当年率

A種優先配当年率 = 初年度A種優先配当金 ÷ A種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)

上記の算式において「初年度A種優先配当金」とは、A種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)に、下記に定める日本円TIBOR(12ヶ月物)(ただし、A種優先株式の発行決議日をA種優先配当年率決定日として算出する。)に1.05%を加えた割合(%未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を四捨五入する。)を乗じて得られる数に、払込期日より平成22年3月31日までの実日数である1を分子とし365を分母とする分数を乗じることにより算出した額の金銭(円位未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を切上げる。)とする。

平成22年4月1日に開始する事業年度以降の各事業年度に係るA種優先配当年率

A種優先配当年率 = 日本円TIBOR(12ヶ月物) + 1.05%

なお、平成22年4月1日に開始する事業年度以降の各事業年度に係るA種優先配当年率は、%未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を四捨五入する。

上記の算式において「日本円TIBOR(12ヶ月物)」とは、毎年4月1日(ただし、当該日が銀行休業日の場合はその直後の営業日)(以下、「A種優先配当年率決定日」という。)の午前11時における日本円12ヶ月物トーキョー・インター・バンク・オフアード・レート(日本円TIBOR)として全国銀行協会によって公表される数値又はこれに準ずるものと認められるものを指すものとする。日本円TIBOR(12ヶ月物)が公表されていない場合は、A種優先配当年率決定日において、ロンドン時間午前11時現在のReuters3750ページに表示されるロンドン・インター・バンク・オフアード・レート(ユーロ円LIBOR12ヶ月物(360日ベース))として、英国銀行協会(BBA)によって公表される数値を、日本円TIBOR(12ヶ月物)に代えて用いるものとする。「営業日」とはロンドン及び東京において銀行が外貨及び為替取引の営業を行っている日をいう。ただし、上記の算出の結果が8%を超える場合には、A種優先配当年率は8%とする。

(3) 非累積条項

ある事業年度においてA種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対してする剰余金の配当の額がA種優先配当金の額に達しないときは、その不足額は翌事業年度以降に累積しない。

(4) 非参加条項

A種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対しては、A種優先配当金の額を超えて剰余金の配当を行わない。ただし、当銀行が行う吸収分割手続の中で行われる会社法第758条第8号口もしくは同法第760条第7号口に規定される剰余金の配当又は当銀行が行う新設分割手続の中で行われる同法第763条第12号口もしくは第765条第1項第8号口に規定される剰余金の配当についてはこの限りではない。

(5) A種優先中間配当金

当銀行は、定款第40条に定める中間配当をするときは、当該中間配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載又は記録されたA種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対し、普通株主及び普通登録株式質権者に先立ち、A種優先株式1株につき、A種優先配当金の額の2分の1を上限とする金銭(以下、「A種優先中間配当金」という。)を支払う。

(6) 残余財産

残余財産の分配

当銀行は、残余財産を分配するときは、A種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対し、普通株主及び普通登録株式質権者に先立ち、A種優先株式1株につき、A種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)に下記に定める経過A種優先配当金相当額を加えた額の金銭を支払う。

非参加条項

A種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対しては、上記のほか、残余財産の分配は行わない。

経過A種優先配当金相当額

A種優先株式1株当たりの経過A種優先配当金相当額は、残余財産の分配が行われる日(以下、「分配日」という。)において、分配日の属する事業年度の初日(同日を含む。)から分配日(同日を含む。)までの日数にA種優先配当金の額を乗じた金額を365で除して得られる額(円位未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を切上げる。)をいう。ただし、分配日の属する事業年度においてA種優先株主又はA種優先登録株式質権者に対してA種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。



## (7) 議決権

A種優先株主は、全ての事項につき株主総会において議決権を行使することができない。ただし、A種優先株主は、定時株主総会にA種優先配当金の額全部(A種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額)の支払いを受ける旨の議案が提出されないときはその定時株主総会より、A種優先配当金の額全部(A種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額)の支払いを受ける旨の議案が定時株主総会において否決されたときはその定時株主総会の終結の時より、A種優先配当金の額全部(A種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額)の支払いを受ける旨の決議がなされる時までの間は、全ての事項について株主総会において議決権を行使することができる。

## (8) 普通株式を対価とする取得請求権

## 取得請求権

A種優先株主は、下記に定める取得を請求することのできる期間中、当銀行に対し、自己の有するA種優先株式を取得することを請求することができる。かかる取得の請求があった場合、当銀行は、A種優先株主がかかる取得の請求をしたA種優先株式を取得すると引換えに、下記に定める財産を当該A種優先株主に対して交付するものとする。ただし、単元未満株式については、本項に規定する取得の請求をすることができないものとする。

## 取得を請求することのできる期間

平成22年10月1日から平成37年3月31日まで(以下、「取得請求期間」という。)とする。

## 取得と引換えに交付すべき財産

当銀行は、A種優先株式の取得と引換えに、A種優先株主が取得の請求をしたA種優先株式数にA種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)を乗じた額を下記に定める取得価額で除した数の普通株式を交付する。なお、A種優先株式の取得と引換えに交付すべき普通株式の数に1株に満たない端数があるときは、会社法第167条第3項に従ってこれを取扱う。

## 当初取得価額

取得価額は、当初、取得請求期間の初日に先立つ5連続取引日(取得請求期間の初日を含まず、証券会社法人福岡証券取引所(当銀行の普通株式が複数の金融商品取引所に上場されている場合、取得請求期間の初日に先立つ1年間における出来高が最多の金融商品取引所)における当銀行の普通株式の終値(気配表示を含む。以下、「終値」という。)が算出されない日を除く。)の毎日の終値の平均値に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。)とする。ただし、かかる計算の結果、取得価額が下記に定める下限取得価額を下回る場合は、下限取得価額とする。

## 取得価額の修正

取得請求期間において、毎月第3金曜日(以下、「決定日」という。)の翌日以降、取得価額は、決定日まで(当日を含む。)の直近の5連続取引日(ただし、終値のない日は除き、決定日が取引日ではない場合は、決定日の直前の取引日までの5連続取引日とする。)の終値の平均値に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。)に修正される。ただし、かかる計算の結果、修正後取得価額が下記に定める下限取得価額を下回る場合は、修正後取得価額は下限取得価額とする。なお、上記5連続取引日の初日以降決定日まで(当日を含む。)の間に、下記に定める取得価額の調整事由が生じた場合、修正後取得価額は、取締役会が適当と判断する金額に調整される。

## 上限取得価額

取得価額には上限を設けない。

## 下限取得価額

A種優先株式の発行決議日から(当日を含まない。)の5連続取引日(ただし、終値のない日を除く。)における終値の平均値の50%に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。)を「下限取得価額」という(ただし、下記による調整を受ける。)

## 取得価額の調整

- イ. A種優先株式の発行後、次の各号のいずれかに該当する場合には、取得価額(下限取得価額を含む。)を次に定める算式(以下、「取得価額調整式」という。)により調整する(以下、調整後の取得価額を「調整後取得価額」という。)。取得価額調整式の計算については、円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。

$$\text{調整後取得価額} = \text{調整前取得価額} \times \frac{\text{既発行普通株式数} + \frac{\text{交付普通株式数} \times \text{1株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行普通株式数} + \text{交付普通株式数}}$$

- ( )取得価額調整式に使用する時価(下記八.に定義する。以下同じ。)を下回る払込金額をもって普通株式を発行又は自己株式である普通株式を処分する場合(無償割当ての場合を含む。)(ただし、当銀行の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式もしくは新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。以下本において同じ。))その他の証券(以下、「取得請求権付株式等」という。)、又は当銀行の普通株式の交付と引換えに当銀行が取得することができる取得条項付株式もしくは取得条項付新株予約権その他の証券(以下、「取得条項付株式等」という。)が取得又は行使され、これに対して普通株式が交付される場合を除く。)

調整後取得価額は、払込期日(払込期間が定められた場合は当該払込期間の末日とする。以下同じ。)(無償割当ての場合はその効力発生日)の翌日以降、又は株主に募集株式の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日の翌日以降、これを適用する。

( )株式の分割をする場合

調整後取得価額は、株式の分割のための基準日に分割により増加する普通株式数(基準日における当銀行の自己株式である普通株式に関して増加する普通株式数を除く。)が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、その基準日の翌日以降、これを適用する。

( )取得価額調整式に使用する時価を下回る価額(下記二.に定義する。以下、本( )、下記( )及び( )ならびに下記八.( )において同じ。)をもって当銀行の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式等を発行する場合(無償割当ての場合を含む。)

調整後取得価額は、当該取得請求権付株式等の払込期日(新株予約権の場合は割当日)(無償割当ての場合はその効力発生日)に、又は株主に取得請求権付株式等の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日に、当該取得請求権付株式等の全部が当初の条件で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、その払込期日(新株予約権の場合は割当日)(無償割当ての場合はその効力発生日)の翌日以降、又はその基準日の翌日以降、これを適用する。

上記にかかわらず、上記の普通株式が交付されたものとみなされる日において価額が確定しておらず、後日一定の日(以下、「価額決定日」という。)に価額が決定される取得請求権付株式等を発行した場合において、決定された価額が取得価額調整式に使用する時価を下回る場合には、調整後取得価額は、当該価額決定日に残存する取得請求権付株式等の全部が価額決定日に確定した条件で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、当該価額決定日の翌日以降これを適用する。

( )当銀行が発行した取得請求権付株式等に、価額がその発行日以降に修正される条件(本イ.又はロ.と類似する希薄化防止のための調整を除く。)が付されている場合で、当該修正が行われる日(以下、「修正日」という。)における修正後の価額(以下、「修正価額」という。)が取得価額調整式に使用する時価を下回る場合

調整後取得価額は、修正日に、残存する当該取得請求権付株式等の全部が修正価額で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、当該修正日の翌日以降これを適用する。

なお、かかる取得価額調整式の適用に際しては、下記(a)ないし(c)の場合に応じて、調整後取得価額を適用する日の前日において有効な取得価額に、それぞれの場合に定める割合(以下、「調整係数」という。)を乗じた額を調整前取得価額とみなすものとする。

(a)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記( )又は本( )による調整が行われていない場合

調整係数は1とする。

(b)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記( )又は本( )による調整が行われている場合であって、当該調整後、当該修正日までの間に、上記( )による取得価額の修正が行われている場合

調整係数は1とする。

ただし、下限取得価額の算定においては、調整係数は、上記( )又は本( )による直前の調整を行う前の下限取得価額を当該調整後の下限取得価額で除した割合とする。

(c)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記( )又は本( )による調整が行われている場合であって、当該調整後、当該修正日までの間に、上記( )による取得価額の修正が行われていない場合

調整係数は、上記( )又は本( )による直前の調整を行う前の取得価額を当該調整後の取得価額で除した割合とする。

( )取得条項付株式等の取得と引換えに取得価額調整式に使用される時価を下回る価額をもって普通株式を交付する場合

調整後取得価額は、取得日の翌日以降これを適用する。

ただし、当該取得条項付株式等について既に上記( )又は( )による取得価額の調整が行われている場合には、調整後取得価額は、当該取得と引換えに普通株式が交付された後の完全希薄化後普通株式数(下記ホ.に定義する。)が、当該取得の直前の既発行普通株式数を超えるときに限り、当該超過する普通株式数が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、取得の直前の既発行普通株式数を超えないときは、本( )による調整は行わない。

( )株式の併合をする場合

調整後取得価額は、株式の併合の効力発生日以降、併合により減少する普通株式数(効力発生日における当銀行の自己株式である普通株式に関して減少した普通株式数を除く。)を負の値で表示して交付普通株式数とみなして取得価額調整式を適用して算出し、これを適用する。

- ロ．上記イ．( )ないし( )に掲げる場合のほか、合併、会社分割、株式交換又は株式移転等により、取得価額(下限取得価額を含む。)の調整を必要とする場合は、取締役会が適当と判断する取得価額(下限取得価額を含む。)に変更される。
- ハ．( )取得価額調整式に使用する「時価」は、調整後取得価額を適用する日に先立つ5連続取引日の終値の平均値(終値のない日数を除く。)とする。ただし、平均値の計算は円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。なお、上記5連続取引日の間に、取得価額の調整事由が生じた場合、調整後取得価額は、本 に準じて調整する。
- ( )取得価額調整式に使用する「調整前取得価額」は、調整後取得価額を適用する日の前日において有効な取得価額とする。
- ( )取得価額調整式に使用する「既発行普通株式数」は、基準日がある場合はその日(上記イ．( )ないし( )に基づき当該基準日において交付されたものとみなされる普通株式数は含まない。)の、基準日がない場合は調整後取得価額を適用する日の1ヶ月前の日の、当銀行の発行済普通株式数(自己株式である普通株式の数を除く。)に当該取得価額の調整の前に上記イ．及びロ．に基づき「交付普通株式数」とみなされた普通株式であって未だ交付されていない普通株式数(ある取得請求権付株式等について上記イ．( ) (b)又は(c)に基づく調整が初めて適用される日(当該日を含む。)からは、当該取得請求権付株式等に係る直近の上記イ．( ) (b)又は(c)に基づく調整に先立って適用された上記イ．( )又は( )に基づく調整により「交付普通株式数」とみなされた普通株式数は含まない。)を加えたものとする。
- ( )取得価額調整式に使用する「1株当たりの払込金額」とは、上記イ．( )の場合には、当該払込金額(無償割当ての場合は0円)(金銭以外の財産による払込の場合には適正な評価額)、上記イ．( )及び( )の場合には0円、上記イ．( )ないし( )の場合には価額(ただし、( )の場合には修正価額)とする。
- ニ．上記イ．( )ないし( )及び上記ハ．( )において「価額」とは、取得請求権付株式等又は取得条項付株式等の発行に際して払込みがなされた額(新株予約権の場合には、その行使に際して出資される財産の価額を加えた額とする。)から、その取得又は行使に際して当該取得請求権付株式等又は取得条項付株式等の所持人に交付される普通株式以外の財産の価額を控除した金額を、その取得又は行使に際して交付される普通株式の数で除した金額をいう。
- ホ．上記イ．( )において「完全希薄化後普通株式数」とは、調整後取得価額を適用する日の既発行普通株式数から、上記ハ．( )に従って既発行普通株式数に含められている未だ交付されていない普通株式数で当該取得条項付株式等に係るものを除いて、当該取得条項付株式等の取得により交付される普通株式数を加えたものとする。
- ヘ．上記イ．( )ないし( )において、当該各行為に係る基準日が定められ、かつ当該各行為が当該基準日以降に開催される当銀行の株主総会における一定の事項に関する承認決議を停止条件としている場合には、上記イ．( )ないし( )の規定にかかわらず、調整後取得価額は、当該承認決議をした株主総会の終結の日の翌日以降にこれを適用する。
- ト．取得価額調整式により算出された調整後取得価額と調整前取得価額との差額が1円未満にとどまるときは、取得価額の調整は、これを行わない。ただし、その後取得価額調整式による取得価額の調整を必要とする事由が発生し、取得価額を算出する場合には、取得価額調整式中の調整前取得価額に代えて調整前取得価額からこの差額を差し引いた額を使用する。

#### 合理的な措置

上記 ないし に定める取得価額((10) に定める一斉取得価額を含む。以下、本 において同じ。)は、希薄化防止及び異なる種類の株式の株主間の実質的公平の見地から解釈されるものとし、その算定が困難となる場合又は算定の結果が不合理となる場合には、当銀行の取締役会は、取得価額の適切な調整その他の合理的に必要な措置をとるものとする。

#### 取得請求受付場所

東京都千代田区丸の内1丁目4番1号

三井住友信託銀行株式会社 本店

#### 取得請求の効力発生

取得請求の効力は、取得請求に要する書類が上記 に記載する取得請求受付場所に到着した時に発生する。

#### (9) 金銭を対価とする取得条項

##### 金銭を対価とする取得条項

当銀行は、平成32年4月1日以降、取締役会が別に定める日(以下、「取得日」という。)が到来したときは、法令上可能な範囲で、A種優先株式の全部又は一部を取得することができる。ただし、取締役会は、当該取締役会の開催日までの30連続取引日(開催日を含む。)の全ての日において終値が下限取得価額を下回っている場合で、かつ、金融庁の事前承認を得ている場合に限り、取得日を定めることができる。この場合、当銀行は、かかるA種優先株式を取得するのと引換えに、下記 に定める財産をA種優先株主に対して交付するものとする。なお、A種優先株式の一部を取得するときは、按分比例の方法による。取得日の決定後も(8) に定める取得請求権の行使は妨げられないものとする。

## 取得と引換えに交付すべき財産

当銀行は、A種優先株式の取得と引換えに、A種優先株式1株につき、A種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)に経過A種優先配当金相当額を加えた額の金銭を交付する。なお、本 においては、(6) に定める経過A種優先配当金相当額の計算における「残余財産の分配が行われる日」及び「分配日」をいずれも「取得日」と読み替えて、経過A種優先配当金相当額を計算する。

## (10) 普通株式を対価とする取得条項

## 普通株式を対価とする取得条項

当銀行は、取得請求期間の末日までに当銀行に取得されていないA種優先株式の全てを取得請求期間の末日の翌日(以下、「一斉取得日」という。)をもって取得する。この場合、当銀行は、かかるA種優先株式を取得するのと引換えに、各A種優先株主に対し、その有するA種優先株式数にA種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、A種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合又はこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)を乗じた額を下記 に定める普通株式の時価(以下、「一斉取得価額」という。)で除した数の普通株式を交付するものとする。A種優先株式の取得と引換えに交付すべき普通株式の数に1株に満たない端数がある場合には、会社法第234条に従ってこれを取扱う。

## 一斉取得価額

一斉取得価額は、一斉取得日に先立つ45取引日目に始まる30連続取引日の毎日の終値の平均値(終値が算出されない日を除く。)に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。)とする。ただし、かかる計算の結果、一斉取得価額が下限取得価額を下回る場合は、一斉取得価額は下限取得価額とする。

## (11) 株式の分割又は併合及び株式無償割当て

## 分割又は併合

当銀行は、株式の分割又は併合を行うときは、普通株式及びA種優先株式の種類ごとに、同時に同一の割合で行う。

## 株式無償割当て

当銀行は、株式無償割当てを行うときは、普通株式及びA種優先株式の種類ごとに、当該種類の株式の無償割当てを、同時に同一の割合で行う。

## (2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

## (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

## (4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

## (5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成22年3月31日 (注)	26,000	79,424	6,500	12,252	6,500	10,844

## (注) 第三者割当(A種優先株式)

発行株数	26,000千株
発行価格	500円
資本組入額	250円
割当先	株式会社整理回収機構

## (6) 【所有者別状況】

## 普通株式

平成27年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数1,000株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	13	32	6	572	1	3	2,385	3,012	
所有株式数(単元)	237	22,394	92	15,190	180	29	14,727	52,849	575,449
所有株式数の割合(%)	0.45	42.37	0.17	28.74	0.34	0.06	27.87	100.00	

(注) 自己株式 324,796株は「個人その他」に 324単元、「単元未満株式の状況」に 796株含まれております。

## A種優先株式

平成27年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数1,000株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)		1						1	
所有株式数(単元)		26,000						26,000	
所有株式数の割合(%)		100.00						100.00	

## (7) 【大株主の状況】

## 所有株式数別

平成27年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社整理回収機構	東京都千代田区丸の内3丁目4番2号	A種優先株式 26,000	32.73
株式会社西日本シティ銀行	福岡市博多区博多駅前3丁目1番1号	普通株式 1,886	2.37
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	普通株式 1,747	2.19
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目2番1号	普通株式 1,738	2.18
富士火災海上保険株式会社	大阪市中央区南船場1丁目18番11号	普通株式 1,617	2.03
宮崎太陽銀行従業員持株会	宮崎市広島2丁目1番31号	普通株式 1,440	1.81
みずほ信託銀行株式会社 退職給付信託 南日本銀行口 再信託受託者 資産管理サービス信託銀行株式会社	東京都中央区晴海1丁目8番12号	普通株式 1,420	1.78
株式会社福岡中央銀行	福岡市中央区大名2丁目12番1号	普通株式 1,398	1.76
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神2丁目13番1号	普通株式 1,224	1.54
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	普通株式 1,191	1.49
計		A種優先株式 26,000 普通株式 13,663	49.93

## 所有議決権数別

平成27年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有議決権数 (個)	総株主の議決権に 対する所有議決権 数の割合(%)
株式会社西日本シティ銀行	福岡市博多区博多駅前3丁目1番1号	1,886	3.59
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,747	3.32
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目2番1号	1,738	3.30
富士火災海上保険株式会社	大阪市中央区南船場1丁目18番11号	1,617	3.07
宮崎太陽銀行従業員持株会	宮崎市広島2丁目1番31号	1,440	2.74
みずほ信託銀行株式会社 退職 給付信託 南日本銀行口 再信託 受託者 資産管理サービス信託 銀行株式会社	東京都中央区晴海1丁目8番12号	1,420	2.70
株式会社福岡中央銀行	福岡市中央区大名2丁目12番1号	1,398	2.66
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神2丁目13番1号	1,224	2.33
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,191	2.26
株式会社豊和銀行	大分市王子中町4番10号	1,170	2.22
計		14,831	28.23

- (注) 1. みずほ信託銀行株式会社退職給付信託南日本銀行口再信託受託者資産管理サービス信託銀行株式会社の所有株式は、退職給付信託の信託財産であり、その議決権行使の指図権は、株式会社南日本銀行が留保しています。
2. 上記 所有株式数別に記載している株式会社整理回収機構所有のA種優先株式は、議決権を有しておりません。なお、A種優先株式の所有者は、下記のとおりであります。また、A種優先株式の内容については、「1 株式等の状況(1) 株式の総数等」に記載しております。

## A種優先株式

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	総株主の議決権に 対する所有議決権 数の割合(%)
株式会社整理回収機構	東京都千代田区丸の内3丁目4番2号	26,000	
計		26,000	

## (8) 【議決権の状況】

## 【発行済株式】

平成27年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	A種優先株式 26,000,000		(注) 1
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 324,000		
完全議決権株式(その他)	普通株式 52,525,000	52,525	
単元未満株式	普通株式 575,449		一単元(1,000株)未満の株式(注) 2
発行済株式総数	79,424,449		
総株主の議決権		52,525	

(注) 1. A種優先株式の内容については、「1 株式等の状況 (1) 株式等の状況 発行済株式」に記載しております。

2. 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式 796株が含まれております。

## 【自己株式等】

平成27年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社宮崎太陽銀行	宮崎市広島2丁目1番31号	324,000		324,000	0.40
計		324,000		324,000	0.40

## (9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

## (1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

## (2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

## (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	10,285	1,914,359
当期間における取得自己株式	1,296	246,544

(注) 当期間における取得自己株式には、平成27年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

## (4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他				
保有自己株式数	324,796		326,092	

(注) 当期間における取得自己株式には、平成27年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。



### 3 【配当政策】

当行は、中間配当と期末配当の年2回の安定的配当を行うことを基本としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の普通株式の配当につきましては、中間配当を1株当たり2.50円、期末配当を1株当たり2.50円といたしました。

当行は、経営環境が変革するなかで、地域社会のニーズに的確に応え、その繁栄に積極的に貢献していくため、内部留保の増大を図り、経営体質をより健全かつ強靱なものにしていくと同時に、優先株式について約定に従った配当を行うとともに、普通株式の配当につきましては、年2回の安定的配当を確保することにより、株主各位のご期待に報いるよう努力してまいります。

なお、当行は中間配当を行うことができる旨を定款で定めております。

また、銀行法第18条の定めにより剰余金の配当に制限を受けております。剰余金の配当をする場合には、会社法第445条第4項（資本金の額及び準備金の額）の規定にかかわらず、当該剰余金の配当により減少する剰余金の額に5分の1を乗じて得た額を資本準備金又は利益準備金として計上しております。

当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成26年11月11日 取締役会	普通株式	132	2.50
	A種優先株式	89	3.425
平成27年6月25日 定時株主総会	普通株式	132	2.50
	A種優先株式	89	3.425

### 4 【株価の推移】

#### (1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第110期	第111期	第112期	第113期	第114期
決算年月	平成23年3月	平成24年3月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月
最高(円)	260	255	228	225	216
最低(円)	185	197	166	183	170

(注) 最高・最低株価は福岡証券取引所におけるものであります。

#### (2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成26年10月	11月	12月	平成27年1月	2月	3月
最高(円)	187	188	216	212	196	195
最低(円)	170	182	182	183	181	181

(注) 最高・最低株価は福岡証券取引所におけるものであります。

## 5 【役員状況】

男性 13名 女性 0名 (役員のうち女性の比率 0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役頭取	代表取締役	川崎 新一	昭和23年3月1日生	昭和46年4月 株式会社宮崎相互銀行入行 昭和63年4月 あやめ原支店長 平成2年9月 佐土原支店長 平成5年4月 日向支店長 平成8年4月 人事部副部長 平成10年6月 事務部長 平成12年6月 取締役都城支店長 平成14年6月 同 業務監査本部長兼監査部長 兼 コンプライアンス室長 平成16年6月 常勤監査役 平成20年6月 常務取締役 事務部長 平成22年6月 専務取締役 平成23年6月 代表取締役 頭取(現職)	(注)3	普通株式 44
専務取締役	代表取締役	林田 洋二	昭和24年12月24日生	昭和48年4月 株式会社宮崎相互銀行入行 昭和61年9月 審査部部長代理 昭和63年10月 外国部部長代理 平成7年4月 国際部部長代理 兼 貿易相談室長代理 平成8年9月 (株)宮崎太陽キャピタル常務取締役 平成10年9月 総合企画部主任部長代理 平成12年6月 経営企画部長 平成14年6月 執行役員 経営企画部長 平成15年6月 同 経営企画部長兼総務部長 平成16年6月 取締役コンプライアンス統括部長 平成17年7月 同 監査部長 平成20年6月 常勤監査役 平成23年6月 専務 取締役 平成25年6月 代表取締役 専務(現職)	(注)3	普通株式 36
常務取締役	営業統括 部長	河野 文一	昭和29年3月11日生	昭和52年4月 株式会社宮崎相互銀行入行 平成6年4月 出北支店長 平成8年9月 延岡支店副支店長 平成10年4月 日向支店長 平成13年9月 延岡支店長 平成16年9月 営業支援部副部長 兼 CS推進室長 平成17年4月 事務部長 平成20年6月 取締役 本店営業部長 平成22年6月 同 審査部長 平成26年9月 同 営業統括部長 平成27年6月 常務取締役 営業統括部長 兼 企画・推進G長(現職)	(注)3	普通株式 25
取締役	本店営業 部長	杉田 梯治	昭和32年11月20日生	昭和55年4月 株式会社宮崎相互銀行入行 平成11年4月 大塚支店長 平成15年9月 延岡支店副支店長 平成18年4月 門川支店長 平成21年4月 西都支店長 平成23年4月 北支店長 平成25年4月 本店営業部長 平成25年6月 取締役 本店営業部長(現職)	(注)3	普通株式 11
取締役	監査部長	福田 正之	昭和33年2月3日生	昭和55年4月 株式会社宮崎相互銀行入行 平成8年4月 総合企画部部長代理 平成12年6月 経営企画部部長代理 平成19年4月 経営企画部リスク管理室長 平成20年9月 証券国際部長 平成23年6月 経営企画部長 平成25年6月 取締役 経営企画部長 兼 総務G長 兼 リスク管理G長 平成27年6月 同 監査部長(現職)	(注)3	普通株式 11

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	融資部長	志戸本 和 孝	昭和36年 3月24日生	昭和59年 4月 株式会社宮崎相互銀行入行 平成13年 4月 情報企画部部長代理 平成18年 4月 審査部部長代理 平成19年 4月 高鍋支店長 平成21年 4月 大工町支店長 平成23年 4月 日向支店長 平成24年 4月 人事部副部長 平成24年 6月 人事部長 平成26年 6月 取締役 人事部長 平成26年 9月 取締役 融資部長(現職)	(注) 3	普通株式 12
取締役	人事部長	黒 木 浩	昭和36年 9月30日生	昭和59年 4月 株式会社宮崎相互銀行入行 平成13年 4月 情報企画部部長代理 平成19年 4月 営業企画部部長代理 平成20年 4月 審査部部長代理 平成21年 4月 日向北支店長 平成23年 4月 営業推進部部長代理 平成25年 4月 営業統括部 企画推進グループ長 平成26年 9月 人事部長 平成27年 6月 取締役 人事部長(現職)	(注) 3	普通株式 5
取締役		溝 口 孝	昭和17年12月22日生	昭和41年 4月 (株)宮崎日日新聞社入社 平成 2年 4月 東京報道部長 平成 4年 4月 販売局次長兼販売部長 平成 6年 3月 販売局長 平成 8年 6月 取締役販売局長 平成10年 6月 取締役営業推進本部長 平成14年 7月 宮崎ケーブルテレビ(株) 代表取締役副社長 同社 代表取締役社長 平成16年 7月 同社 常勤相談役 平成22年 7月 同社 常勤相談役 兼 平成23年 6月 株式会社宮崎太陽銀行 取締役 平成24年 6月 株式会社宮崎太陽銀行 取締役(現職)	(注) 3	普通株式 16
取締役		堀 和 郎	昭和20年12月10日生	平成 2年 2月 宮崎大学教授(教育学部) 平成 5年 4月 宮崎大学教育学部 附属小学校校長 併任 平成 6年 4月 宮崎大学大学院修士課程 教育学研究科教授 平成 9年 4月 筑波大学教授(教育学系) 転任 平成12年 4月 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授 平成14年 4月 宮崎大学 名誉教授 平成14年 4月 筑波大学附属小学校校長 併任 平成19年 4月 筑波大学人間学群教育学類長 平成20年 4月 筑波大学人間学群長 平成21年 4月 筑波大学 名誉教授 平成21年 4月 東京医療保健大学教授 平成27年 6月 株式会社宮崎太陽銀行 取締役(現職)	(注) 3	普通株式

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役 常勤		鳥原 浩二	昭和30年10月7日生	昭和53年4月 平成5年4月 平成12年6月 平成17年4月 平成19年4月 平成22年6月 平成23年6月	株式会社宮崎相互銀行入行 総合企画部部長代理 経営企画部部長代理 経営企画部副部長 経営企画部長 執行役員 経営企画部長 常勤監査役(現職)	(注)4	普通株式 21
監査役		高柳 憲一	昭和24年2月4日生	昭和46年9月 平成8年4月 平成11年4月 平成13年4月 平成14年4月 平成15年4月 平成15年8月 平成16年4月 平成18年4月 平成19年4月 平成21年4月  平成24年6月	宮崎県入庁 高鍋県税事務所長 県立宮崎病院事務次長 企業局管理部経営企画課長 国際政策課長 自治学院長 企画調整部次長 土木部次長 宮崎県総合博物館長 環境森林部長 宮崎県土地開発公社等 土木三公社 理事長 株式会社宮崎太陽銀行 監査役(現職)	(注)4	普通株式 5
監査役		石野田 幸藏	昭和23年12月10日生	昭和46年9月 平成11年4月 平成13年4月 平成15年4月 平成17年4月 平成19年4月 平成21年4月  平成21年6月 平成25年6月	宮崎県入庁 文化振興課長 教育庁総務課長 西臼杵支庁長 教育庁教育次長 県議会事務局長 財団法人みやざき観光 コンベンション協会参事 同 専務理事 株式会社宮崎太陽銀行 監査役(現職)	(注)4	普通株式 2
監査役		郷 俊介	昭和21年7月10日生	昭和47年4月 昭和49年4月 昭和59年4月 昭和63年4月 平成1年4月 平成6年4月 平成6年10月 平成6年10月 平成26年6月	司法修習生 福岡地方裁判所 判事補 岡山地方裁判所 判事 宮崎地方裁判所 判事 福岡高等裁判所 宮崎支部 判事 同 退官 宮崎県弁護士会弁護士登録 郷法律事務所開設 株式会社宮崎太陽銀行 監査役(現職)	(注)4	普通株式 1
計							普通株式 195

- (注) 1. 取締役 溝口 孝、堀 和郎 は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
2. 監査役 高柳 憲一、石野田 幸藏 及び 郷 俊介 は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
3. 取締役の任期は、平成27年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 監査役 鳥原 浩二、高柳 憲一、及び 郷 俊介 の任期は、平成24年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時まで、監査役 石野田 幸藏 の任期は、平成25年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

## 6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

#### 企業統治の体制の概要等

当行の企業統治の体制は、会社法及び会社法施行規則に基づき、取締役会において「内部統制に係る基本方針」を定めるとともに、その「内部統制に係る基本方針」に基づき、業務の適正を確保する体制として、リスク管理・コンプライアンス管理・内部監査を包括した内部管理体制(内部統制システム)を構築しており、経営の効率性と健全性の維持・向上を図ることを経営の最重要課題の一つとして位置付け、経営意思決定の迅速化・機動性の向上、経営監督機能の強化等、適切なガバナンスが行われる組織及び企業風土構築に取り組むことをその目的としております。

#### イ．内部管理体制(内部統制システム)の整備の状況

取締役会は、お客様第一主義の経営及びリスク管理態勢の強化と遵法精神に富んだ企業風土作りを経営の最重要課題と位置づけ、中期経営計画等に明記し行内外に周知しております。また、相互牽制機能を確保するため、監査役(会)や会計監査人との連携強化や監査部の監査態勢強化を図っております。

業務を担当する取締役は、適切な業務執行、内部管理体制の整備について、それぞれの担当業務の内容・重要性を十分に理解し、また内在するリスクも十分に認識したうえで、顧客保護等も含め業務執行を適切に行い、かつリスクを削減するための体制整備を行っております。

取締役会については、取締役会規定で原則月1回の開催を定めていますが、可能な限り取締役会を開催し、各業務部門から執行状況の報告を受けるほか、合議による経営意思の決定を行い、取締役会運営の透明化、審議の充実化に努めております。

さらに、経営執行に対する監視強化と経営に対する評価の客観性を確保する目的で、取締役会のほか経営会議には必ず常勤監査役の出席を内部規定において定めており、各監査役は取締役会等において客観的な立場で提言を行うなど牽制の効果を発揮しております。

また、当行では内部管理体制の整備状況の確認を目的に、取締役会直轄の組織として監査部を設置し、本部、営業店など全ての業務執行を独自の立場で監査できる体制を構築しております。

#### ロ．リスク管理態勢の整備の状況

当行は経営理念、リスク管理に関する基本理念に基づき、全行的なリスク管理態勢の整備の一環として「リスク管理ポリシー」を制定し、管理のための組織体制を示すとともに、個別リスクに関するものを含むリスク管理の基本方針のほか、統合的リスク管理基準、個別リスクに関する管理基準を定めております。

当行は業務に内在する諸リスクについて管理・検討する組織として頭取を委員長とする「リスク管理委員会」を設置し、自己資本等で示される経営体力の範囲内で適切なリスクテイクを行って収益力の向上を図るとともに、その適切性を確保するための統合的リスク管理を行っており、さらに、取締役会等による検証・確認を行っております。

また、個別リスクを所管する業務部署では、取締役会等の適切な管理の下、定性的な観点からのリスク管理も行っております。

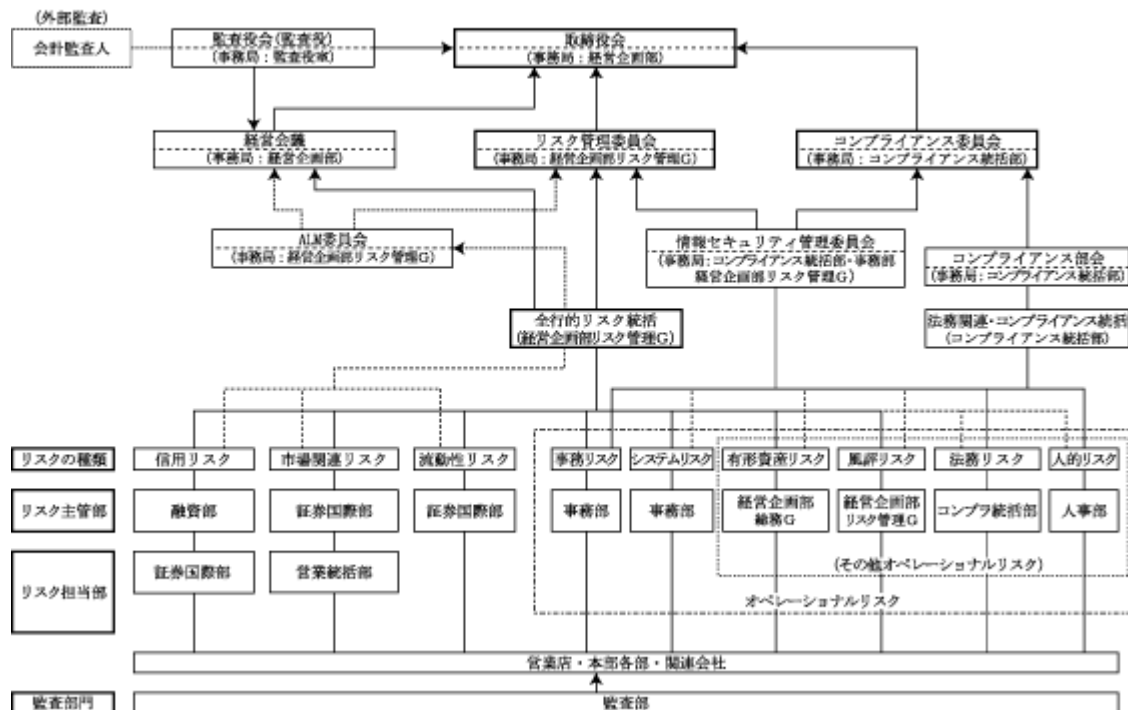
さらに、法令等遵守の徹底と企業倫理の確立による健全かつ公正な業務執行をチェックする組織として、同じく頭取を委員長とする「コンプライアンス委員会」を設置しており、この両委員会には、監査役を構成メンバーに組み入れ、これらの機能状況の継続的な監視を行うこととしております。

当行グループ会社の健全かつ円滑な運営を行うため、「グループ会社運営規定」を定め、グループ会社の協議・報告に関する基準を定めております。当行グループの運営を管理する部署を経営企画部とし、定期的に会議を開催し、適切な管理・指導を行っております。また、監査部は当行の「監査規定」及びグループ会社の内部規定に基づき内部監査を実施しています。

## 当行の内部管理体制図

平成27年4月1日現在

(リスク管理/コンプライアンス管理/内部監査)



(注) 監査部は、当行の機構図にて取締役会直轄と定めております。

## 内部監査及び監査役監査、会計監査の状況

## イ．内部監査

当行の内部管理体制の整備状況の確認を目的に、取締役会直轄の組織として監査部を設置し、本部、営業店など全ての業務執行を独自の立場で監査できる体制を構築するとともに、監査部は、監査役及び監査役会との連携を強化し、会計監査人との協議を緊密に行っております。監査部の人員は、提出日現在で担当の部長を含め10名であります。

## ロ．監査役監査

当行は監査役制度を採用し、監査役会を設置しております。監査役会は、各年度策定する「監査計画書」の基本方針に取締役会に対する監査を最重要テーマの一つとして掲げ、全員が取締役会に出席し客観的な立場で発言を行っており、毎月開催する監査役会等において取締役等の職務の執行を検証しているほか、四半期ごとの会計監査人との協議会や四半期ごとの内部監査部門との定例協議会を行い、監査機能の発揮に努めております。

## ハ．会計監査

当行は会社法及び金融商品取引法に基づく会計監査を新日本有限責任監査法人に委嘱しております。同監査法人及び当行監査に従事する業務執行社員と当行の間には特別な利害関係はありません。

会計監査業務を執行した公認会計士の氏名等については、次のとおりであります。

業務を執行した公認会計士の氏名、所属する監査法人名及び継続監査年数

公認会計士の氏名等		所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員	堺 昌 義	新日本有限責任監査法人
	藤 井 義 博	
	川 口 輝 朗	

継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略しております。

## 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 9名 その他 6名

なお、当行の内部監査部署と監査役及び会計監査人は密接な連携を保ち、効率的な監査を実施するよう努めております。さらに、監査役会は、会計監査人と定例会合をもち、報告や意見交換を実施しております。

## 社外取締役及び社外監査役

当行の社外取締役は2名、社外監査役は3名であります。

社外取締役 溝口孝氏は、民間企業の役員及び代表者を務めた豊富なビジネス経験及び役員としての経営経験を通じて培った幅広い識見を活かし、客観的な観点から当行の経営全般への様々な指導を享受できるものとして選任しております。同氏との間には一般預金者としての経常的な取引関係があり、また、同氏が過去に勤務しておりました宮崎ケーブルテレビ株式会社との間にも経常的な預金及び貸出取引関係がありますが、当行の預金量及び貸出金額に占める取引の規模や性質に照らして、重要性はないものと考えております。なお、同氏が過去に勤務しておりました宮崎ケーブルテレビ株式会社には当行役員が社外役員として就任するなど人的関係がありますが、同氏は既に退社しており、直接利害関係を有するものではないと判断しております。

社外取締役 堀和郎氏は、教育学者としての高い見識と教育組織の管理運営に長く携われた豊富な経験を活かし、当行に対する適切な指導と提言をいただけるものとして選任しております。同氏との間には一般預金者としての経常的な取引関係がありますが、当行の預金量に占める取引の規模や性質に照らして、重要性はないものと考えております。

社外監査役 高柳憲一氏は、行政機関経験者として地元経済に精通しており、人格、識見のうえで当行監査役として適任であることから選任しております。同氏との間には一般預金者としての経常的な取引関係がありますが、当行の預金量に占める取引の規模や性質に照らして、重要性はないものと考えております。

社外監査役 石野田幸藏氏は、行政機関経験者として地元経済に精通しており、人格、識見のうえで当行監査役として適任であることから選任しております。同氏との間には一般預金者としての経常的な取引関係がありますが、当行の預金量に占める取引の規模や性質に照らして、重要性はないものと考えております。

社外監査役 郷俊介氏は、弁護士としての専門性や長年の経験を有しており、人格、識見のうえで当行監査役として適任であることから選任しております。同氏との間には一般預金者としての経常的な取引関係があり、また、同氏が代表を務めております郷法律事務所との間にも経常的な預金取引関係がありますが、当行の預金量に占める取引の規模や性質に照らして、重要性はないものと考えております。

なお、社外取締役である溝口孝氏と堀和郎氏、社外監査役である高柳憲一氏、石野田幸藏氏 及び 郷俊介氏は、職務執行にあたり一般株主と利益相反の生じるおそれがないと判断し独立役員に指定しており、福岡証券取引所に届け出ております。

当行は、社外取締役及び社外監査役には、一般株主と利益相反が生じるおそれのない、客観的・中立的立場から、それぞれの専門知識・経験等を活かした社外的観点からの監督又は監査、及び助言・提言等をそれぞれ行っていただけのように、その選任に当たっては、独立性を重視しております。

なお、社外取締役・社外監査役を選任するための独立性に関する明文の基準又は方針はありませんが、当行の社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性に関しては、福岡証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準（「企業行動規範に関する規則の取扱い」6．（2）d）を参考に、経営者や特定の利害関係人との関連がなく、一般株主と利益相反が生ずるおそれがない候補者を選任しております。

社外取締役は取締役会に出席し、報告事項や決議事項について意見を述べております。また、社外監査役は取締役会や監査役会等を通じて内部監査、監査役監査及び会計監査の監査内容や監査結果についての報告、並びに内部統制部門からの報告を受けて、適時適切に意見や助言を行っております。

当行は社外取締役並びに社外監査役と、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が定める最低責任限度額を限度としております。

## 役員の報酬等の内容

### イ．提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額

当行では、取締役に対し総額で1億8百万円（うち社外取締役3百万円）並びに常勤監査役に対し総額で16百万円及び社外監査役に対し総額で9百万円を報酬その他の職務遂行の対価として支払っております。

また、上記金額には当事業年度における業績連動報酬額（取締役21百万円）は含まれておりますが、使用人兼務取締役の使用人分給与及び賞与51百万円は含まれておりません。

なお、当行の役員の報酬等の額につきましては、取締役の報酬限度額は、平成27年6月25日開催の第114期定時株主総会において年額180百万円（うち社外取締役10百万円）以内と決議されており、監査役の報酬限度額は、平成24年6月28日開催の第111期定時株主総会において年額35百万円以内と決議されております。

当事業年度（自平成26年4月1日 至平成27年3月31日）

役員区分	員数	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の内訳		
			基本報酬	賞与	業績連動報酬
取締役	8	105	84		21
監査役	1	16	16		
社外役員	5	12	12		

（注）上記には、平成26年6月26日開催の第113期定時株主総会終結の時をもって退任した取締役1名及び監査役1名、並びに平成27年6月25日開催の第114期定時株主総会終結の時をもって退任した取締役1名を含んでおります。

□．役員の報酬等の額の決定に関する方針

当行は、企業価値の持続的な向上を意識した経営を推進することで株主重視の経営意識を高めるとともに、コーポレート・ガバナンスの強化を図ることを目的として、平成24年6月28日の定時株主総会終結の時をもって役員退職慰労金制度を廃止するとともに、固定報酬と業績連動報酬とで構成される役員報酬制度を導入しております。

株式の保有状況

イ．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄数及び貸借対照表計上額

銘柄数 53銘柄  
貸借対照表計上額の合計額 12,871百万円

□．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

貸借対照表計上額の大きい順の23銘柄は次のとおりであります。

(特定投資株式)

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
全国保証株式会社	1,900,000	4,729	取引関係の維持・強化
東京センチュリーリース株式会社	205,530	594	取引関係の維持・強化
株式会社宮崎銀行	1,655,000	471	協力関係の維持・強化
株式会社福岡中央銀行	1,334,000	413	協力関係の維持・強化
株式会社南日本銀行	1,503,000	264	協力関係の維持・強化
株式会社西日本シティ銀行	1,087,107	256	協力関係の維持・強化
株式会社九州リースサービス	750,000	208	取引関係の維持・強化
東京海上ホールディングス株式会社	61,955	186	協力関係の維持・強化
野村ホールディングス株式会社	279,000	186	協力関係の維持・強化
株式会社みずほフィナンシャルグループ	767,000	156	協力関係の維持・強化
トモニホールディングス株式会社	355,000	141	協力関係の維持・強化
株式会社大和証券グループ本社	155,000	139	協力関係の維持・強化
株式会社筑邦銀行	608,000	131	協力関係の維持・強化
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ	309,680	131	協力関係の維持・強化
株式会社第三銀行	765,000	130	協力関係の維持・強化
株式会社じもとホールディングス	649,000	128	協力関係の維持・強化
株式会社豊和銀行	1,243,000	119	協力関係の維持・強化
株式会社鹿児島銀行	123,000	74	協力関係の維持・強化
株式会社高知銀行	499,000	73	協力関係の維持・強化
株式会社富山銀行	434,000	70	協力関係の維持・強化
株式会社関西アーバン銀行	280,500	32	協力関係の維持・強化
日本アジア投資株式会社	226,000	23	取引関係の維持・強化
株式会社東和銀行	193,000	19	協力関係の維持・強化



(当事業年度)

貸借対照表計上額の大きい順の23銘柄は次のとおりであります。

(特定投資株式)

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
全国保証株式会社	1,700,000	7,459	取引関係の維持・強化
株式会社宮崎銀行	1,655,000	784	協力関係の維持・強化
東京センチュリーリース株式会社	205,530	692	取引関係の維持・強化
株式会社福岡中央銀行	1,334,000	432	協力関係の維持・強化
株式会社西日本シティ銀行	1,105,102	408	協力関係の維持・強化
株式会社九州リースサービス	750,000	294	取引関係の維持・強化
東京海上ホールディングス株式会社	61,955	276	協力関係の維持・強化
株式会社南日本銀行	1,503,000	257	協力関係の維持・強化
野村ホールディングス株式会社	279,000	201	協力関係の維持・強化
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ	309,680	200	協力関係の維持・強化
トモニホールディングス株式会社	355,000	199	協力関係の維持・強化
株式会社みずほフィナンシャルグループ	767,000	168	協力関係の維持・強化
株式会社第三銀行	765,000	153	協力関係の維持・強化
株式会社じもとホールディングス	649,000	151	協力関係の維持・強化
株式会社大和証券グループ本社	155,000	149	協力関係の維持・強化
株式会社筑邦銀行	514,000	135	協力関係の維持・強化
株式会社富山銀行	434,000	114	協力関係の維持・強化
株式会社豊和銀行	1,243,000	111	協力関係の維持・強化
株式会社鹿児島銀行	123,000	102	協力関係の維持・強化
株式会社高知銀行	499,000	89	協力関係の維持・強化
株式会社関西アーバン銀行	28,050	37	協力関係の維持・強化
株式会社東和銀行	193,000	19	協力関係の維持・強化
日本アジア投資株式会社	226,000	17	取引関係の維持・強化

(みなし保有株式)

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
全国保証株式会社	620,000	2,793	議決権行使の指図権限

- (注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。  
2. みなし保有株式は、退職給付信託に設定しているものであり、「貸借対照表計上額」欄には当事業年度末日における時価に議決権行使の指図権限対象となる株式数を乗じて得た額を、また「保有目的」欄には当該株式について当行が有する権限の内容を記載しております。

## 八．保有目的が純投資目的である投資株式の貸借対照表計上額、受取配当金、売却損益及び評価損益

	前事業年度			
	貸借対照表計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)
上場株式	5,339	150	147	745
非上場株式				

	当事業年度			
	貸借対照表計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)
上場株式	6,820	149	18	2,324
非上場株式				

ニ．当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの該当事項はありません。

ホ．当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの該当事項はありません。

**取締役の定数**

当行の取締役は12名以内とする旨定款に定めております。

**取締役の選任の決議要件**

当行は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

**株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項**

**イ．自己株式の取得**

当行は、自己の株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

**ロ．剰余金の配当等の決定機関**

当行は、株主への機動的な利益還元を行うことを目的として、会社法第454条第5項の規定に基づき、取締役会の決議によって中間配当をすることができる旨定款に定めております。

**株主総会の特別決議の要件**

当行は、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とし、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。

**種類株式**

当行は、資金調達を柔軟かつ機動的に行うための選択肢の多様化を図り、適切な資本政策を実行することを可能とするため、会社法第108条第1項第3号に定める内容(いわゆる議決権制限)について普通株式と異なる定めをした議決権のないA種優先株式を発行しております。単元株式数及び議決権の有無については下記のとおりであります。

なお、株式の保有又はその議決権行使について特記すべきことはありません。

株式の種類	単元株式数	議決権の有無
普通株式	1,000株	有
A種優先株式	1,000株	無

A種優先株式の内容については、「第4 提出会社の状況 1. 株式等の状況 (1) 株式等の状況 発行済株式」に記載しております。

**(2) 【監査報酬の内容等】**

**【監査公認会計士等に対する報酬の内容】**

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	39	0	39	1
連結子会社				
計	39	0	39	1

**【その他重要な報酬の内容】**

該当事項はありません。

**【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】**

当連結会計年度の非監査業務の内容は、外国口座税務コンプライアンス法に関する支援業務であります。

**【監査報酬の決定方針】**

該当事項はありません。

## 第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)の財務諸表について、新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、適正な財務報告が行われる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入するほか、新日本有限責任監査法人や第二地方銀行協会等外部団体が行う研修・セミナー等に積極的に参加しております。

## 1 【連結財務諸表等】

## (1) 【連結財務諸表】

## 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	7 30,856	7 63,750
コールローン及び買入手形	20,000	-
買入金銭債権	2	0
有価証券	1, 7, 12 107,240	1, 7, 12 114,843
貸出金	2, 3, 4, 5, 6, 8 443,675	2, 3, 4, 5, 6, 8 449,117
リース債権及びリース投資資産	4,410	4,244
その他資産	7 2,626	7 2,147
有形固定資産	10, 11 13,519	10, 11 13,008
建物	3,907	3,756
土地	9 8,726	9 8,726
その他の有形固定資産	885	525
無形固定資産	264	234
ソフトウェア	200	163
のれん	2	1
リース資産	28	38
その他の無形固定資産	33	30
退職給付に係る資産	-	1,528
繰延税金資産	40	14
支払承諾見返	869	839
貸倒引当金	4,682	4,717
資産の部合計	618,824	645,013
<b>負債の部</b>		
預金	7 575,408	7 591,660
借入金	205	302
その他負債	2,638	3,084
退職給付に係る負債	89	-
睡眠預金払戻損失引当金	307	362
偶発損失引当金	123	121
繰延税金負債	1,063	3,224
再評価に係る繰延税金負債	9 1,240	9 1,123
支払承諾	869	839
負債の部合計	581,947	600,719
<b>純資産の部</b>		
資本金	12,252	12,252
資本剰余金	10,844	10,844
利益剰余金	5,905	7,537
自己株式	124	126
株主資本合計	28,878	30,509
その他有価証券評価差額金	5,336	9,943
土地再評価差額金	9 1,685	9 1,801
退職給付に係る調整累計額	122	1,081
その他の包括利益累計額合計	7,144	12,826
少数株主持分	853	958
純資産の部合計	36,876	44,293
負債及び純資産の部合計	618,824	645,013

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
経常収益	15,104	15,839
資金運用収益	10,331	10,530
貸出金利息	8,798	8,733
有価証券利息配当金	1,483	1,751
コールローン利息及び買入手形利息	48	19
預け金利息	1	26
その他の受入利息	0	0
役務取引等収益	1,903	1,910
その他業務収益	2,378	2,324
その他経常収益	491	1,073
償却債権取立益	1	0
その他の経常収益	490	1,073
経常費用	12,876	12,740
資金調達費用	376	307
預金利息	312	304
コールマネー利息及び売渡手形利息	0	0
借入金利息	31	2
社債利息	31	-
役務取引等費用	1,370	1,575
その他業務費用	2,176	2,155
営業経費	7,903	7,860
その他経常費用	1,048	841
貸倒引当金繰入額	756	587
その他の経常費用	1 291	1 254
経常利益	2,228	3,098
特別利益	1,621	-
固定資産処分益	9	-
退職給付信託設定益	1,612	-
特別損失	13	4
固定資産処分損	11	4
その他	1	-
税金等調整前当期純利益	3,836	3,094
法人税、住民税及び事業税	298	920
法人税等調整額	988	84
法人税等合計	1,287	1,005
少数株主損益調整前当期純利益	2,549	2,088
少数株主利益	125	105
当期純利益	2,424	1,983

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	2,549	2,088
その他の包括利益	1,956	1,561
その他有価証券評価差額金	968	4,606
土地再評価差額金	11	116
退職給付に係る調整額	-	958
包括利益	3,506	7,770
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	3,380	7,665
少数株主に係る包括利益	125	105

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自平成25年4月1日 至 平成26年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	12,252	10,844	3,924	122	26,900
当期変動額					
剰余金の配当			454		454
当期純利益			2,424		2,424
自己株式の取得				2	2
自己株式の処分			0	0	0
土地再評価差額金の取崩			11		11
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計			1,980	1	1,978
当期末残高	12,252	10,844	5,905	124	28,878

	その他の包括利益累計額				少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	4,368	1,696	-	6,065	726	33,691
当期変動額						
剰余金の配当						454
当期純利益						2,424
自己株式の取得						2
自己株式の処分						0
土地再評価差額金の取崩						11
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	968	11	122	1,078	127	1,206
当期変動額合計	968	11	122	1,078	127	3,185
当期末残高	5,336	1,685	122	7,144	853	36,876

当連結会計年度（自平成26年4月1日至平成27年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	12,252	10,844	5,905	124	28,878
会計方針の変更による累積的影響額			94		94
会計方針の変更を反映した当期首残高	12,252	10,844	6,000	124	28,973
当期変動額					
剰余金の配当			445		445
当期純利益			1,983		1,983
自己株式の取得				1	1
自己株式の処分			0	0	0
土地再評価差額金の取崩					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	1,537	1	1,535
当期末残高	12,252	10,844	7,537	126	30,509

	その他の包括利益累計額				少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	5,336	1,685	122	7,144	853	36,876
会計方針の変更による累積的影響額			-			94
会計方針の変更を反映した当期首残高	5,336	1,685	122	7,144	853	36,971
当期変動額						
剰余金の配当						445
当期純利益						1,983
自己株式の取得						1
自己株式の処分						0
土地再評価差額金の取崩						
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	4,606	116	958	5,681	104	5,786
当期変動額合計	4,606	116	958	5,681	104	7,322
当期末残高	9,943	1,801	1,081	12,826	958	44,293



## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	3,836	3,094
減価償却費	383	399
のれん償却額	0	0
貸倒引当金の増減( )	399	35
退職給付引当金の増減額( は減少)	1,916	-
退職給付に係る資産の増減額( は増加)	-	62
退職給付に係る負債の増減額( は減少)	1,891	279
役員退職慰労引当金の増減額( は減少)	-	-
睡眠預金払戻損失引当金の増減額( は減少)	0	55
偶発損失引当金の増減額( は減少)	2	1
資金運用収益	10,331	10,530
資金調達費用	376	307
有価証券関係損益( )	176	783
為替差損益( は益)	11	98
固定資産処分損益( は益)	2	4
退職給付信託設定損益( は益)	1,612	-
貸出金の純増( )減	8,094	5,442
預金の純増減( )	15,878	16,287
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減( )	102	97
預け金(日銀預け金を除く)の純増( )減	47	460
コールローン等の純増( )減	18,865	20,000
リース債権及びリース投資資産の純増( )減	103	166
資金運用による収入	10,441	10,502
資金調達による支出	571	387
その他	35	67
小計	28,437	34,017
法人税等の支払額	108	524
法人税等の還付額	28	94
営業活動によるキャッシュ・フロー	28,357	33,587
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有価証券の取得による支出	30,951	25,367
有価証券の売却による収入	15,672	9,005
有価証券の償還による収入	11,024	16,352
有形固定資産の取得による支出	289	129
無形固定資産の取得による支出	64	35
有形固定資産の売却による収入	29	330
投資活動によるキャッシュ・フロー	4,579	156
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
劣後特約付借入金の返済による支出	1,000	-
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による支出	1,000	-
配当金の支払額	455	445
少数株主への配当金の支払額	1	1
自己株式の取得による支出	2	1
自己株式の売却による収入	0	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	2,458	448
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	2
現金及び現金同等物の増減額( は減少)	21,319	33,297
現金及び現金同等物の期首残高	8,644	29,963
現金及び現金同等物の期末残高	1 29,963	1 63,261

## 【注記事項】

( 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 )

### 1. 連結の範囲に関する事項

#### (1) 連結子会社3社

主要な連結子会社は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。

#### (2) 非連結子会社

みやざき太陽チャレンジファンド投資事業有限責任組合

JAIC-みやざき太陽1号投資事業有限責任組合

みやざき未来応援ファンド投資事業有限責任組合

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

### 2. 持分法の適用に関する事項

#### (1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

#### (2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

#### (3) 持分法非適用の非連結子会社

みやざき太陽チャレンジファンド投資事業有限責任組合

JAIC - みやざき太陽1号投資事業有限責任組合

みやざき未来応援ファンド投資事業有限責任組合

持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

#### (4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は次のとおりであります。

3月末日 3社

### 4. 会計処理基準に関する事項

#### (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。

#### (2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については、移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の非連結子会社出資金については、移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式及び受益証券については、連結会計年度末前1ヵ月の市場価格等の平均に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、債券については、連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

#### (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

#### (4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

当行の有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物：15年～50年

その他：5年～6年

連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。

無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は10,714百万円(前連結会計年度末は10,666百万円)であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

(6) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

(7) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度に伴う負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。

(8) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用、数理計算上の差異及び会計基準変更時差異の費用処理方法(又は損益処理方法)は次のとおりであります。

過去勤務費用 : その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として10年)による定額法により損益処理

数理計算上の差異 : 各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理

会計基準変更時差異(1,202百万円) : 主として15年による按分額を費用処理しております。

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(9) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産及び負債については、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(10) リース取引の処理方法

(借手側)

当行及び連結子会社の所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する連結会計年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理を行っております。

(貸手側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引については、通常の売買取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(11) 収益及び費用の計上基準

ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準

リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(12) 重要なヘッジ会計の方法

当行は貸出金の一部につき、金利リスクの回避の手段として、金利スワップ取引を行っており、金利スワップの特例処理及び繰延ヘッジによる会計処理を行っております。また、ヘッジの有効性の評価につきましては、特例処理につきましては特例処理の要件の判定をもって有効性の判定に代え、また繰延ヘッジにつきましては個別に有効性の判定を行っております。

(13) のれんの償却方法及び償却期間

20年間の定額法により償却を行っております。

(14) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(15) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

( 会計方針の変更 )

( 「退職給付に関する会計基準」等の適用 )

「退職給付に関する会計基準」( 企業会計基準第26号 平成24年 5月17日。以下「退職給付会計基準」という。 ) 及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」( 企業会計基準適用指針第25号平成27年 3月26日。以下「退職給付適用指針」という。 ) を、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めについて当連結会計年度より適用し、退職給付債務及び勤務費用の計算方法を見直し、退職給付見込額の期間帰属方法を期間定額基準から給付算定式基準へ変更するとともに、割引率の決定方法を従業員の平均残存勤務期間等を考慮した単一年数の債券利回りを基礎として決定する方法から、退職給付の支払見込期間及び支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を基礎として決定する方法へ変更しております。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従って、当連結会計年度の期首において、退職給付債務及び勤務費用の計算方法の変更に伴う影響額を利益剰余金に加減しております。

この結果、当連結会計年度の期首の退職給付に係る負債が 146百万円減少し、利益剰余金が94百万円増加しております。また、当連結会計年度の経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響は軽微であります。

なお、1株当たり情報に与える影響は当該箇所に記載しております。

( 未適用の会計基準等 )

企業結合に関する会計基準等 ( 平成25年 9月13日 )

( 1 ) 概要

当該会計基準等は、子会社株式の追加取得等において支配が継続している場合の子会社に対する親会社の持分変動の取扱い、取得関連費用の取扱い、暫定的な会計処理の取扱い、当期純利益の表示および少数株主持分から非支配株主持分への変更を中心に改正されたものであります。

( 2 ) 適用予定日

当行は、改正後の当該会計基準等を平成27年 4月 1日に開始する連結会計年度の期首から適用する予定であります。

( 3 ) 当該会計基準等の適用による影響

当該会計基準等の適用による影響は、未定であります。

( 連結貸借対照表関係 )

1. 非連結子会社の出資金の総額

	前連結会計年度 (平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (平成27年 3月31日)
出資金	300百万円	457百万円

2. 貸出金のうち、破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (平成27年 3月31日)
破綻先債権額	553百万円	583百万円
延滞債権額	11,744百万円	10,320百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第 1項第 3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第 4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

## 3. 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
3ヵ月以上延滞債権	百万円	百万円

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

## 4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
貸出条件緩和債権額	2,023百万円	3,589百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

## 5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
合計額	14,320百万円	14,492百万円

なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

## 6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
	3,215百万円	2,970百万円

## 7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	423百万円	1,005百万円
計	423百万円	1,005百万円
担保資産に対応する債務		
預金	482百万円	425百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
有価証券	6,187百万円	3,903百万円
預け金	0百万円	0百万円

また、その他資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
保証金	114百万円	114百万円

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
融資未実行残高	12,379百万円	20,706百万円
うち契約期間が1年以内のもの	12,379百万円	20,706百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日 平成10年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税法に基づいて、合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
	2,947百万円	3,078百万円

10. 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
減価償却累計額	7,647百万円	7,754百万円

11. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
圧縮記帳額	560百万円	560百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	( 百万円)	( 百万円)

12. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
	100百万円	50百万円

(連結損益計算書関係)

1. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
株式等売却損	138百万円	12百万円

## (連結包括利益計算書関係)

## 1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		(自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
その他有価証券評価差額金：				
当期発生額	1,610		6,996	
組替調整額	175		782	
税効果調整前	1,434		6,214	
税効果額	466		1,607	
その他有価証券評価差額金	968		4,606	
土地再評価差額金：				
当期発生額				
組替調整額	18			
税効果調整前	18			
税効果額	6		116	
土地再評価差額金	11		116	
退職給付に係る調整額：				
当期発生額			1,359	
組替調整額			42	
税効果調整前			1,401	
税効果額			443	
退職給付に係る調整額			958	
その他の包括利益合計	956		5,681	

## (連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)

## 1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	53,424			53,424	
A種優先株式	26,000			26,000	
合計	79,424			79,424	
自己株式					
普通株式	308	10	0	317	(注)
合計	308	10	0	317	

(注) 普通株式の自己株式の増減は、単元未満株式の買取りによる増加及び自己株式処分による減少であります。

## 2. 配当に関する事項

## (1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成25年 6月27日 定時株主総会	普通株式	132	2.50	平成25年 3月31日	平成25年 6月28日
	A種優先株式	98	3.775	平成25年 3月31日	平成25年 6月28日
平成25年11月13日 取締役会	普通株式	132	2.50	平成25年 9月30日	平成25年12月3日
	A種優先株式	91	3.525	平成25年 9月30日	平成25年12月3日

## (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の 総額(百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成26年 6月26日 定時株主総会	普通株式	132	利益剰余金	2.50	平成26年 3月31日	平成26年 6月27日
	A種優先株式	91	利益剰余金	3.525	平成26年 3月31日	平成26年 6月27日

当連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

## 1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	53,424			53,424	
A種優先株式	26,000			26,000	
合計	79,424			79,424	
自己株式					
普通株式	317	10	0	328	(注)
合計	317	10	0	328	

(注) 普通株式の自己株式の増減は、単元未満株式の買取りによる増加及び自己株式処分による減少であります。

## 2. 配当に関する事項

## (1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成26年6月26日 定時株主総会	普通株式	132	2.50	平成26年3月31日	平成26年6月27日
	A種優先株式	91	3.525	平成26年3月31日	平成26年6月27日
平成26年11月11日 取締役会	普通株式	132	2.50	平成26年9月30日	平成26年12月2日
	A種優先株式	89	3.425	平成26年9月30日	平成26年12月2日

## (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の 総額(百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成27年6月25日 定時株主総会	普通株式	132	利益剰余金	2.50	平成27年3月31日	平成27年6月26日
	A種優先株式	89	利益剰余金	3.425	平成27年3月31日	平成27年6月26日

## (連結キャッシュ・フロー計算書関係)

## 1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
現金預け金勘定	30,856百万円	63,750百万円
預け金(日銀預け金を除く)	892百万円	489百万円
現金及び現金同等物	29,963百万円	63,261百万円



(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

(1) 所有権移転外ファイナンス・リース取引

(借手側)

リース資産の内容  
無形固定資産  
ソフトウェアであります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計処理基準に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(貸手側)

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
リース料債権部分の金額	4,860	4,675
見積残存価額部分の金額	0	0
受取利息相当額	451	432

リース料債権部分の金額の回収予定額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
1年以内	1,615	1,590
1年超2年以内	1,298	1,263
2年超3年以内	954	907
3年超4年以内	608	575
4年超5年以内	297	264
5年超	85	73

(2) 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び期末残高相当額

前連結会計年度(平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	288	158		129
無形固定資産				
合計	288	158		129

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

当連結会計年度(平成27年 3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	288	168		119
無形固定資産				
合計	288	168		119

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

未経過リース料期末残高相当額等

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (平成27年 3月31日)
1年内	9	9
1年超	119	109
合計	129	119
リース資産減損勘定の残高		

(注) 未経過リース料期末残高相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額、支払利息相当額及び減損損失

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
支払リース料	9	9
リース資産減損勘定の取崩額		
減価償却費相当額	9	9
支払利息相当額		
減損損失		

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法により償却しております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、貸出を中心とした金融サービス事業を行っており、また有価証券への投資を行っています。これらの事業を行うため、市場の状況や長短のバランスを調整して、顧客からの預金によって資金調達を行っています。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当行では、資産及び負債の総合的管理(A L M)を行っています。その一環として、デリバティブ取引も行っています。

また、当行の一部の連結子会社には、リース業務を行う子会社や有価証券を保有する子会社があります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されています。当期の連結決算日現在における貸出金のうち、16.5%は不動産業・物品賃貸業に対するものであり、当該不動産業・物品賃貸業を巡る経済環境等の状況の変化により、契約条件に従った債務履行がなされない可能性があります。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託及び組合出資金であり、満期保有目的、純投資目的及び事業推進目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。なお、その他有価証券には、リスクが高いものとして、流動性に乏しい外国証券(デリバティブが内包されている仕組債券)1,106百万円が含まれております。

また、長期固定金利貸出金及び預金は金利の変動リスクに晒されておりますが、一部は金利スワップ取引を行うことにより当該リスクを回避しております。当行では、この金利スワップ取引をヘッジ手段として、ヘッジ対象である貸出金及び預金に金利スワップの特例処理を行っているものがあります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行グループは、当行の与信に関する諸規定及び信用リスクに関する方針、基準に従い、貸出金について、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、保証や担保の設定、問題債権への対応など、与信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店のほか審査管理本部により行われ、また、定期的に経営会議や取締役会を開催し、審議・報告を行っております。さらに、与信管理の状況については、監査部がチェックしております。

有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、証券国際部及び経営企画部リスク管理グループにおいて、信用情報や時価の把握を定期的に行うことで管理しております。

市場リスクの管理

イ. 金利リスクの管理

当行グループは、A L Mによって金利の変動リスクを管理しております。リスク管理ポリシーにおいて、リスク管理方法や手続等の詳細を明記しており、A L M委員会及びリスク管理委員会において実施状況の把握の確認、今後の対応等の協議を行っております。日常的には経営企画部リスク管理グループにおいて金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、ギャップ分析や金利感応度分析等によりモニタリングを行い、四半期ベースでリスク管理委員会に報告しております。なお、A L Mにより、金利の変動リスクをヘッジするための金利スワップ等のデリバティブ取引も行っております。

ロ. 為替リスクの管理

当行グループは、為替の変動リスクに関して、マッチングを基本とし、外国為替のエクスポージャーを極力抑えることとしております。

ハ. 価格変動リスクの管理

有価証券を含む投資商品の保有については、取締役会の監督の下、資金運用規定に従い行われております。運用は証券国際部において行っており、保有限度額の設定のほか、継続的なモニタリングを通じて、価格変動リスクの軽減を図っております。

ニ. デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取引の執行、ヘッジ有効性の評価に関する部門を分離し内部牽制を確立するとともに、円金利スワップ取引規定及びヘッジ取引管理基準に基づき実施されております。

ホ．市場リスクに係る定量的情報

当行グループにおいて、主要なリスク変数である金利リスク、株価変動リスク及び外国為替変動リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「貸出金」、「有価証券」、「銀行業における預金」、「デリバティブ取引」のうち金利スワップ取引であります。当行グループでは、これらの金融資産及び金融負債について、統合VaRを金利リスク、株価変動リスク及び外国為替変動リスクの管理にあたっての定量的分析に利用しております。

VaRの算定にあたっては、分散共分散法(保有期間120日(但し、満期保有目的債券については240日)、信頼区間99.0%、観測期間1,200営業日)を採用しております。

平成27年3月31日(当期の連結決算日)現在で当行グループの市場リスク量(損失額の推計値)は、全体で15,919百万円(前連結会計年度は11,666百万円)であります。

なお、当行グループでは、モデルが算出するVaRと実際の損益を比較するバックテストを実行する体制を構築しており、使用する計測モデルは十分な精度により市場リスクを捕捉していることを確認しております。但し、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、ALMを通して、適時にグループ全体の資金管理を行うほか、資金調達手段の多様化、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません((注2)参照)。

前連結会計年度(平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	30,856	30,856	
(2) コールローン	20,000	20,000	
(3) 有価証券			
満期保有目的の債券	2,601	2,429	172
その他有価証券	103,287	103,287	
(4) 貸出金	443,675		
貸倒引当金(*1)	4,620		
	439,054	451,508	12,454
(5) リース債権及びリース投資資産	4,410	4,768	358
資産計	600,213	612,853	12,640
(1) 預金	575,408	575,786	377
負債計	575,408	575,786	377
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	112	112	
ヘッジ会計が適用されているもの			
デリバティブ取引計	112	112	

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(\*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しており、デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

当連結会計年度(平成27年3月31日)

(単位:百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	63,750	63,750	
(2) コールローン			
(3) 有価証券			
満期保有目的の債券	550	495	54
その他有価証券	112,837	112,837	
(4) 貸出金	449,117		
貸倒引当金(*1)	4,683		
	444,434	450,596	6,162
(5) リース債権及びリース投資資産	4,244	4,596	351
資産計	625,816	632,276	6,460
(1) 預金	591,660	591,889	229
負債計	591,660	591,889	229
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	118	118	
ヘッジ会計が適用されているもの			
デリバティブ取引計	118	118	

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(\*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しており、デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

#### 資産

##### (1) 現金預け金

預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

##### (2) コールローン

コールローンについては、残存期間が短期間(3ヶ月以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

##### (3) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、当該債権の信用リスク区分に応じたデフォルト率、保全率等を勘案した元利金キャッシュ・フローをリスク・フリー・レートで割り引いた現在価値を時価としております。

##### (4) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。一方、固定金利によるものは、貸出金債権ごとに、当該債権の信用リスク区分に応じたデフォルト率、保全率等を勘案した元利金キャッシュ・フローをリスク・フリー・レートで割り引いた現在価値を時価としております。なお、残存期間が短期間(3ヶ月以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表価額から現在の貸倒見積額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、当該帳簿価額を時価としております。

なお、ヘッジ会計が適用されている金利スワップの特例処理は、ヘッジ対象とする貸出金と一体として処理しているため、その時価は割引現在価値により算定し、貸出金の時価に含めております。

##### (5) リース債権及びリース投資債権

リース債権及びリース投資資産は、各リース債権及びリース投資資産の元利金キャッシュ・フローを一定の期間ごとにまとめ、その期間ごとのキャッシュ・フロー額を、当該期間のリスク・フリー・レートに貸倒実績率に基づいた信用リスク要因を上乗せした利率で割り引いた現在価値を時価としております。

## 負債

## (1) 預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。なお、預入期間が短期間(3ヶ月以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

## デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(3) 有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	399	411
組合出資金(*3)	952	1,044
合計	1,352	1,455

(\*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(\*2) 前連結会計年度において、非上場株式について0百万円減損処理を行っております。  
当連結会計年度において、非上場株式について4百万円減損処理を行っております。

(\*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額  
前連結会計年度(平成26年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	22,443					
コールローン	20,000					
買入金銭債権	1				0	
有価証券	14,628	31,163	12,130	13,881	13,778	1,785
満期保有目的の債券	50		50	501	500	1,500
うち国債						
地方債						
社債	50		50	501		
外国証券					500	1,500
その他有価証券のうち 満期があるもの	14,578	31,163	12,080	13,380	13,278	285
うち国債	4,559	14,799	3,022	11,117	11,511	
地方債	1,591	1,063	1,258	1,454		
社債	7,560	11,587	5,457	807	1,136	235
外国証券	601	3,624	1,306		300	
その他	266	88	1,036		331	49
貸出金(*)	70,431	67,618	59,243	45,288	48,665	108,042
合計	127,505	98,782	71,373	59,170	62,445	109,827

(\*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない12,207百万円、  
期間の定めのないもの32,177百万円は含めておりません

当連結会計年度(平成27年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	55,041					
コールローン						
買入金銭債権					0	
有価証券	21,603	16,504	20,009	24,613	6,506	367
満期保有目的の債券			50		500	
うち国債						
地方債						
社債			50			
外国証券					500	
その他有価証券のうち 満期があるもの	21,603	16,504	19,959	24,613	6,006	367
うち国債	12,261	3,516	3,703	22,243	3,136	
地方債	890	939	1,500	632		
社債	7,346	6,510	10,224	1,320	562	189
外国証券	902	4,927	2,802		508	
その他	203	610	1,727	418	1,799	177
貸出金(*)	70,875	69,901	62,255	43,337	51,457	113,099
合計	147,520	86,406	82,264	67,951	57,964	113,466

(\*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない10,890百万円、  
期間の定めのないもの27,301百万円は含めておりません

(注4) 有利子負債の連結決算日後の返済予定額  
前連結会計年度(平成26年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*1)	492,545	65,043	17,819			
合計	492,545	65,043	17,819			

(\*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(平成27年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*1)	509,618	53,299	28,742			
合計	509,618	53,299	28,742			

(\*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

1. 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」が含まれております。
2. 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

## 1. 売買目的有価証券

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
連結会計年度の損益に 含まれた評価差額		

## 2. 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借 対照表計上額を 超えるもの	社債	50	50	0
	外国証券	1,000	1,010	10
	小計	1,050	1,060	10
時価が連結貸借 対照表計上額を 超えないもの	社債	551	549	2
	外国証券	1,000	819	180
	小計	1,551	1,369	182
合計		2,601	2,429	172

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借 対照表計上額を 超えるもの	社債			
	外国証券			
	小計			
時価が連結貸借 対照表計上額を 超えないもの	社債	50	49	0
	外国証券	500	446	54
	小計	550	495	54
合計		550	495	54



## 3. その他有価証券

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	10,479	4,093	6,386
	債券	71,320	70,161	1,159
	国債	42,008	41,233	775
	地方債	4,868	4,761	106
	社債	24,443	24,166	276
	外国証券	3,629	3,599	29
	その他	5,240	4,318	921
	小計	90,670	82,172	8,497
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないも の	株式	3,545	4,096	550
	債券	5,841	5,849	8
	国債	3,000	3,001	0
	地方債	498	499	0
	社債	2,341	2,348	6
	外国証券	2,203	2,206	3
	その他	1,029	1,052	23
	小計	12,618	13,203	585
合計	103,288	95,376	7,912	

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	18,073	6,662	11,411
	債券	66,349	65,094	1,255
	国債	41,860	40,920	940
	地方債	3,763	3,671	91
	社債	20,726	20,503	223
	外国証券	7,440	7,400	40
	その他	8,279	6,615	1,663
	小計	100,143	85,773	14,370
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないも の	株式	1,205	1,398	192
	債券	8,627	8,639	11
	国債	3,000	3,000	0
	地方債	199	200	0
	社債	5,427	5,439	11
	外国証券	1,699	1,706	6
	その他	1,161	1,194	33
	小計	12,693	12,938	244
合計	112,837	98,711	14,125	

## 4. 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当事項はありません。

5. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	2,508	285	138
債券	11,378	33	18
国債	10,680	31	15
地方債			
社債	698	1	2
その他	417	38	4
合計	14,305	357	161

当連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	1,162	794	12
債券	5,693	57	
国債	5,292	56	
地方債			
社債	401	1	
その他			
合計	6,854	852	12

6. 保有目的を変更した有価証券

該当事項はありません。

7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額はありません。

当連結会計年度における減損処理額はありません。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価が取得価額に比べて50%以上下落したものを全てとすることに加え、同30%以上50%未満のものは格付け機関の格付け等を基に「著しい下落」の判断を行っております。

(金銭の信託関係)

該当事項はありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	7,912
その他有価証券	7,912
その他の金銭の信託	
( )繰延税金負債	2,575
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	5,336
( )少数株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	5,336

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	14,126
その他有価証券	14,126
その他の金銭の信託	
( )繰延税金負債	4,183
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	9,943
( )少数株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	9,943

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

該当事項はありません。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(平成26年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物 売建 買建 通貨オプション 売建 買建				
店頭	通貨スワップ 為替予約 売建 買建 通貨オプション 売建 買建 その他 売建 買建	15,000		15,113	112
合計				15,113	112

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(平成27年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物 売建 買建 通貨オプション 売建 買建				
店頭	通貨スワップ 為替予約 売建 買建 通貨オプション 売建 買建 その他 売建 買建	15,000		15,118	118
合計				15,118	118

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引  
該当事項はありません。

(4) 債券関連取引  
該当事項はありません。

(5) 商品関連取引  
該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引  
該当事項はありません。

## 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

### (1) 金利関連取引

前連結会計年度(平成26年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定 金利先物 金利オプション	貸出金			
	その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定	貸出金	262	262	(注)3.
	合計				

(注) 1. 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

#### 2. 時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

3. 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金の時価に含めて記載してあります。

当連結会計年度(平成27年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定 金利先物 金利オプション	貸出金			
	その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定	貸出金	239	239	(注)3.
	合計				

(注) 1. 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

#### 2. 時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定してあります。

3. 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金の時価に含めて記載してあります。

- (2) 通貨関連取引  
該当事項はありません。
- (3) 株式関連取引  
該当事項はありません。
- (4) 債券関連取引  
該当事項はありません。
- (5) 商品関連取引  
該当事項はありません。
- (6) クレジット・デリバティブ取引  
該当事項はありません。

## (退職給付関係)

## 1. 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として企業年金制度及び退職一時金制度を採用しております。

また、当行においては、企業年金制度及び退職一時金制度に対して退職給付信託を設定しております。

なお、連結子会社の一部においても、確定給付型の制度として、退職金規程に基づく退職一時金制度を採用しております。

## 2. 確定給付制度

## (1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
	退職給付債務の期首残高	3,274		3,237
会計方針の変更による累積的影響額			146	
会計方針の変更を反映した期首残高			3,091	
勤務費用	184		188	
利息費用	32		30	
数理計算上の差異の発生額	78		38	
退職給付の支払額	174		183	
過去勤務費用の発生額				
その他				
退職給付債務の期末残高	3,237		3,088	

## (2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
	年金資産の期首残高	1,180		3,147
期待運用収益	23		62	
数理計算上の差異の発生額	199		1,320	
事業主からの拠出額	242		242	
退職給付信託の設定	1,647			
退職給付の支払額	147		155	
その他				
年金資産の期末残高	3,147		4,617	

## (3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
	積立型制度の退職給付債務	3,222		3,072
年金資産	3,147		4,617	
	74		1,544	
非積立型制度の退職給付債務	15		15	
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	89		1,528	
退職給付にかかる負債	89			
退職給付にかかる資産			1,528	
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	89		1,528	

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
勤務費用	184	188
利息費用	32	30
期待運用収益	23	62
数理計算上の差異の費用処理額	23	16
過去勤務費用の費用処理額	21	21
会計基準変更時差異の費用処理額	80	80
確定給付制度に係る退職給付費用	275	198

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
過去勤務費用		21
数理計算上の差異		1,343
会計基準変更時差異		80
合計		1,401

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
未認識過去勤務費用	42	21
未認識数理計算上の差異	227	1,570
未認識会計基準変更時差異	80	
合計	189	1,591

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
債券	18.13%	14.12%
株式	78.48%	82.16%
その他	3.39%	3.72%
合計	100.00%	100.00%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度及び退職一時金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度54.18%、当連結会計年度61.40%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎

区分	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
割引率	0.98%	0.98%
長期期待運用収益率	2.00%	2.00%
予想昇給率	1.00 ~ 5.92%	1.00 ~ 5.92%



(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	4,417百万円	4,167百万円
退職給付に係る負債	621	54
有価証券有税償却	1,257	995
その他	654	556
繰延税金資産小計	6,951	5,774
評価性引当額	4,828	4,284
繰延税金資産合計	2,123	1,489
繰延税金負債		
資産除去債務	0	
その他有価証券評価差額金	2,575	4,183
退職給付信託設定益	570	516
繰延税金負債合計	3,146	4,699
繰延税金資産(負債)の純額	1,023百万円	3,209百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
法定実効税率	37.7 %	35.3 %
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	1.4	1.7
住民税均等割等	0.5	0.7
評価性引当額の減少	4.5	3.1
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	1.7	1.4
その他	0.8	0.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	33.5 %	32.4 %

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第9号)が平成27年3月31日に公布され、平成27年4月1日以後に開始する連結会計年度から法人税率等の引下げが行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の35.37%から、平成27年4月1日に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異等については32.82%に、平成28年4月1日に開始する連結会計年度以降に解消が見込まれる一時差異等については32.06%となります。

この税率変更により、繰延税金資産は1百万円減少し、繰延税金負債は392百万円減少し、その他有価証券評価差額金は467百万円増加し、法人税等調整額は126百万円増加し、退職給付に係る調整累計額は52百万円増加しております。

また、再評価に係る繰延税金負債は116百万円減少し、土地再評価差額金は同額増加しております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

当行グループの一部の店舗に使用されている有害物質を除去する義務に関し資産除去債務を計上しております。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を、当該建物の減価償却期間(主に39年)と見積り、割引率は当該減価償却期間に見合う国債の流通利回り(主に2.33%)を使用して資産除去債務の金額を算定しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
期首残高	11百万円	11百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	百万円	百万円
時の経過による調整額	0百万円	0百万円
資産除去債務の履行による減少額	百万円	百万円
期末残高	11百万円	12百万円

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び実績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものです。

当行グループは、銀行業を中心にリース・保証等事業及びその他の金融サービス等の提供を事業活動として展開しており、「銀行業」、「リース・保証等事業」を報告セグメントとしております。

2. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であります。

また、セグメント内の内部経常収益は、一般的な取引と同様の取引条件に基づいております。

3. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース・保証等事業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	12,773	2,321	15,094	10	15,104		15,104
セグメント間の内部経常収益	61	106	168	177	345	345	
計	12,834	2,427	15,262	187	15,449	345	15,104
セグメント利益	2,032	190	2,222	6	2,229	1	2,228
セグメント資産	617,174	5,771	622,945	65	623,010	4,186	618,824
セグメント負債	581,331	4,870	586,202	13	586,215	4,268	581,947
その他の項目							
減価償却費	345	16	362	1	363	20	383
のれんの償却額		0	0		0		0
資金運用収益	10,371	4	10,376	0	10,376	45	10,331
資金調達費用	371	55	427		427	51	376
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	348	4	352	1	354		354

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の収益計上額との差異について記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、銀行事務代行業、ベンチャーキャピタル業務を含んでおります。

3. 調整額は、セグメント間取引消去であります。

4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務 諸表計上額
	銀行業	リース・ 保証等事業	計				
経常収益							
外部顧客に対する 経常収益	13,548	2,273	15,822	16	15,839		15,839
セグメント間の内部 経常収益	44	118	162	181	344	344	
計	13,592	2,392	15,985	198	16,183	344	15,839
セグメント利益	2,933	163	3,097	4	3,101	2	3,098
セグメント資産	641,945	5,680	647,626	68	647,695	2,681	645,013
セグメント負債	599,768	4,672	604,440	13	604,454	3,734	600,719
その他の項目							
減価償却費	336	12	348	1	350	48	399
のれんの償却額		0	0		0		0
資金運用収益	10,553	4	10,558	0	10,558	27	10,530
資金調達費用	304	51	355		355	48	307
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	113	0	113	6	119		119

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の収益計上額との差異について記載しております。
2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、銀行事務代行業、ベンチャーキャピタル業務を含んでおります。
3. 調整額は、セグメント間取引消去であります。
4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	8,798	1,840	2,321	2,144	15,104

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益のみでありますので、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	8,733	2,604	2,273	2,226	15,839

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益のみでありますので、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

のれんの償却額及び未償却残高は、僅少であるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者情報について記載すべき重要なものではありません。

## (1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
1株当たり純資産額	431円 80銭	569円 64銭
1株当たり当期純利益金額	42円 19銭	34円 00銭
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	20円 12銭	16円 37銭

(注) 1. 1株当たりの純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
1株当たり純資産額			
純資産の部の合計額	百万円	36,876	44,293
純資産の部の合計から控除する金額	百万円	13,944	14,047
うち優先株式	百万円	13,000	13,000
うち優先株式に係る配当額	百万円	91	89
うち少数株主持分	百万円	853	958
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	22,931	30,246
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	千株	53,106	53,096

2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
1株当たり当期純利益金額			
当期純利益	百万円	2,424	1,983
普通株主に帰属しない金額	百万円	183	178
うち定時株主総会決議による優先配当額	百万円	91	89
うち中間優先配当額	百万円	91	89
普通株式に係る当期純利益	百万円	2,240	1,805
普通株式の期中平均株式数	千株	53,112	53,102
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額			
当期純利益調整額	百万円	183	178
うち優先株式に係る金額	百万円	183	178
普通株式増加数	千株	67,357	68,062
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要			

3. 「会計方針の変更」に記載のとおり、「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下、「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成27年3月26日。以下、「退職給付適用指針」という。)を、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めについて、当連結会計年度より適用し、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従っております。

この結果、当連結会計年度の期首の1株当たり純資産が、1円78銭増加しております。なお、1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額に与える影響は軽微であります。

## (重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	205	302	1.06	
再割引手形				
借入金	205	302	1.06	平成27年4月～ 平成32年1月
1年以内に返済予定のリース債務	10	10		
リース債務(1年以内に返済予定 のものを除く。)	7	7		平成28年4月～ 平成28年11月

(注) 1. 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。なお、リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を、控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

2. 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	222	20	20	20	20
リース債務(百万円)	10	7			

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」及び「その他負債」中のリース債務の内訳を記載しております。

【資産除去債務明細表】

資産除去債務に関する注記に記載しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益(百万円)	3,710	7,600	11,278	15,839
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(百万円)	699	1,291	1,969	3,094
四半期(当期)純利益金額(百万円)	428	892	1,356	1,983
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	8.07	15.13	23.86	34.00

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	8.07	7.05	8.73	10.13

## 2 【財務諸表等】

## (1) 【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	30,848	63,729
現金	8,413	8,708
預け金	7 22,435	7 55,020
コールローン及び買入手形	20,000	-
買入金銭債権	2	0
有価証券	1, 7, 10 107,241	1, 7, 10 114,842
国債	45,009	44,860
地方債	5,367	3,963
社債	27,386	26,204
株式	14,426	19,692
その他の証券	15,051	20,122
貸出金	2, 3, 4, 5, 8 447,564	2, 3, 4, 5, 8 453,002
割引手形	6 3,215	6 2,970
手形貸付	16,799	14,155
証書貸付	391,482	404,691
当座貸越	36,066	31,185
その他資産	1,640	1,067
未決済為替貸	82	64
前払費用	2	7
未収収益	633	619
金融派生商品	112	118
その他の資産	7 809	7 258
有形固定資産	9 13,357	9 12,837
建物	3,897	3,746
土地	8,726	8,726
リース資産	60	61
その他の有形固定資産	673	304
無形固定資産	228	190
ソフトウェア	196	160
リース資産	1	-
その他の無形固定資産	30	29
前払年金費用	-	132
支払承諾見返	862	834
貸倒引当金	4,571	4,691
資産の部合計	617,174	641,945



(単位：百万円)

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
<b>負債の部</b>		
預金	7 575,497	7 591,736
当座預金	6,884	6,738
普通預金	260,800	269,938
貯蓄預金	3,409	3,298
通知預金	1,125	1,337
定期預金	280,439	286,845
定期積金	3,020	3,677
その他の預金	19,816	19,900
借入金	5	2
借入金	5	2
その他負債	2,035	2,678
未決済為替借	175	155
未払法人税等	224	776
未払費用	669	602
前受収益	316	288
給付補填備金	1	0
リース債務	62	61
資産除去債務	11	12
その他の負債	574	781
退職給付引当金	264	179
睡眠預金払戻損失引当金	307	362
偶発損失引当金	123	121
繰延税金負債	996	2,727
再評価に係る繰延税金負債	1,240	1,123
支払承諾	862	834
<b>負債の部合計</b>	<b>581,331</b>	<b>599,768</b>
<b>純資産の部</b>		
資本金	12,252	12,252
資本剰余金	10,844	10,844
資本準備金	10,844	10,844
利益剰余金	5,845	7,459
利益準備金	352	441
その他利益剰余金	5,493	7,017
繰越利益剰余金	5,493	7,017
自己株式	122	124
<b>株主資本合計</b>	<b>28,820</b>	<b>30,432</b>
<b>その他有価証券評価差額金</b>	<b>5,336</b>	<b>9,943</b>
<b>土地再評価差額金</b>	<b>1,685</b>	<b>1,801</b>
<b>評価・換算差額等合計</b>	<b>7,021</b>	<b>11,744</b>
<b>純資産の部合計</b>	<b>35,842</b>	<b>42,177</b>
<b>負債及び純資産の部合計</b>	<b>617,174</b>	<b>641,945</b>

## 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
経常収益	12,834	13,592
資金運用収益	10,371	10,553
貸出金利息	8,842	8,759
有価証券利息配当金	1,479	1,747
コールローン利息及び買入手形利息	48	19
預け金利息	1	26
その他の受入利息	0	0
役務取引等収益	1,877	1,891
受入為替手数料	600	579
その他の役務収益	1,277	1,311
その他業務収益	84	63
外国為替売買益	11	4
商品有価証券売却益	0	0
国債等債券売却益	71	58
その他経常収益	500	1,084
償却債権取立益	1	0
株式等売却益	285	794
その他の経常収益	213	289
経常費用	10,802	10,658
資金調達費用	371	304
預金利息	312	304
コールマネー利息及び売渡手形利息	0	0
借入金利息	27	0
社債利息	31	-
役務取引等費用	1,385	1,587
支払為替手数料	137	142
その他の役務費用	1,247	1,444
その他業務費用	42	52
国債等債券売却損	22	0
国債等債券償却	19	51
営業経費	7,902	7,862
その他経常費用	1,101	852
貸倒引当金繰入額	810	600
株式等売却損	138	12
株式等償却	0	4
その他の経常費用	151	234
経常利益	2,032	2,933
特別利益	1,612	-
固定資産処分益	-	-
退職給付信託設定益	1,612	-
特別損失	13	4
固定資産処分損	11	4
その他	1	-
税引前当期純利益	3,631	2,929
法人税、住民税及び事業税	234	890
法人税等調整額	980	72
法人税等合計	1,214	963
当期純利益	2,416	1,965

## 【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	12,252	10,844	10,844	261	3,611	3,872
当期変動額						
利益準備金の積立				91	91	
剰余金の配当					455	455
当期純利益					2,416	2,416
自己株式の取得						
土地再評価差額金の取崩					11	11
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)						
当期変動額合計				91	1,881	1,972
当期末残高	12,252	10,844	10,844	352	5,493	5,845

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	120	26,849	4,368	1,696	6,065	32,915
当期変動額						
利益準備金の積立						
剰余金の配当		455				455
当期純利益		2,416				2,416
自己株式の取得	2	2				2
土地再評価差額金の取崩		11				11
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)			968	11	956	956
当期変動額合計	2	1,970	968	11	956	2,926
当期末残高	122	28,820	5,336	1,685	7,021	35,842

当事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	12,252	10,844	10,844	352	5,493	5,845
会計方針の変更による累積的影響額					94	94
会計方針の変更を反映した当期首残高	12,252	10,844	10,844	352	5,587	5,939
当期変動額						
利益準備金の積立				89	89	-
剰余金の配当					446	446
当期純利益					1,965	1,965
自己株式の取得						
土地再評価差額金の取崩						
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						
当期変動額合計	-	-	-	89	1,430	1,519
当期末残高	12,252	10,844	10,844	441	7,017	7,459

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	122	28,820	5,336	1,685	7,021	35,842
会計方針の変更による累積的影響額		94				94
会計方針の変更を反映した当期首残高	122	28,914	5,336	1,685	7,021	35,936
当期変動額						
利益準備金の積立		-				-
剰余金の配当		446				446
当期純利益		1,965				1,965
自己株式の取得	1	1				1
土地再評価差額金の取崩						
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			4,606	116	4,722	4,722
当期変動額合計	1	1,517	4,606	116	4,722	6,240
当期末残高	124	30,432	9,943	1,801	11,744	42,177

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。

#### 2. 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については、移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式等については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式及び受益証券については、決算期末前1カ月の市場価格等の平均に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、債券については、決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

#### 3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

#### 4. 固定資産の減価償却の方法

##### (1) 有形固定資産(リース資産を除く)

有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法)を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物：15年～50年

その他：5年～6年

##### (2) 無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

##### (3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、零としております。

#### 5. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債については、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

#### 6. 引当金の計上基準

##### (1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は10,714百万円(前事業年度末は10,666百万円)であります。

##### (2) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込み額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用、数理計算上の差異及び会計基準変更時差異の費用処理方法(又は損益処理方法)は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として10年)による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌事業年度から損益処理

会計基準変更時差異(1,202百万円)：主として15年による按分額を費用処理しております。

##### (3) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

##### (4) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度に伴う負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。

#### 7. リース取引の処理方法

所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日以前に開始する事業年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。

8. ヘッジ会計の方法

預金、貸出金の一部につき、金利リスクの回避の手段として、金利スワップ取引を行っており、金利スワップの特例処理及び繰延ヘッジによる会計処理を行っております。また、ヘッジの有効性の評価につきましては、特例処理につきましては特例処理の要件の判定をもって有効性の判定に代え、また繰延ヘッジにつきましては個別に有効性の判定を行っております。

9. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用及び会計基準変更時差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

(会計方針の変更)

(「退職給付に関する会計基準」等の適用)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号平成27年3月26日。以下「退職給付適用指針」という。)を、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めについて当事業年度より適用し、退職給付債務及び勤務費用の計算方法を見直し、退職給付見込額の期間帰属方法を期間定額基準から給付算定式基準へ変更するとともに、割引率の決定方法を従業員の平均残存勤務期間等を考慮した単一年数の債券利回りを基礎として決定する方法から、退職給付の支払見込期間及び支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を基礎として決定する方法へ変更しております。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従って、当事業年度の期首において、退職給付債務及び勤務費用の計算方法の変更に伴う影響額を利益剰余金に加減しております。

この結果、当事業年度の期首の退職給付に係る負債が146百万円減少し、繰越利益剰余金が94百万円増加しております。また、当事業年度の経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響は軽微であります。

なお、当事業年度の1株当たり純資産は1円78銭増加しております。また、1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額に与える影響は軽微であります。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式及び出資額総額

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
株式	11百万円	11百万円
出資金	299百万円	454百万円

2. 貸出金のうち、破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
破綻先債権額	553百万円	583百万円
延滞債権額	11,654百万円	10,306百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
3ヵ月以上延滞債権	百万円	百万円

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
貸出条件緩和債権	2,023百万円	3,589百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
合計額	14,231百万円	14,479百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
	3,215百万円	2,970百万円

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	423百万円	1,005百万円
計	423百万円	1,005百万円
担保資産に対応する債務		
預金	482百万円	425百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
有価証券	6,187百万円	3,903百万円
預け金	0百万円	0百万円

また、その他の資産には保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
保証金	114百万円	114百万円

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
融資未実行残高	13,800百万円	22,209百万円
うち契約残存期間が1年以内のもの	13,800百万円	22,209百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
圧縮記帳額	560百万円	560百万円
(当該事業年度の圧縮記帳額)	( 百万円)	( 百万円)

10. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当行の保証債務の額

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
	100百万円	50百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(平成26年3月31日現在)及び当事業年度(平成27年3月31日現在)ともに該当事項はありません。

- (注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

(百万円)

	前事業年度	当事業年度
子会社株式及び出資金	310	465
関連会社株式		
合計	310	465

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。



## (税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	4,386百万円	4,159百万円
退職給付引当金	683	545
有価証券有税償却	1,257	996
その他	616	521
繰延税金資産小計	6,945	6,223
評価性引当額	4,796	4,251
繰延税金資産合計	2,149	1,971
繰延税金負債		
資産除去債務	0	
その他有価証券評価差額金	2,575	4,183
退職給付信託設定益	570	516
繰延税金負債合計	3,146	4,699
繰延税金資産(負債)の純額	996百万円	2,727百万円

## 2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
法定実効税率 (調整)	37.7 %	35.3 %
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	1.5	1.8
住民税均等割等	0.6	0.7
評価性引当額の減少	4.8	3.3
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	1.8	1.5
その他	0.6	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	33.5 %	32.8 %

## 3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第9号)が平成27年3月31日に公布され、平成27年4月1日以後に開始する事業年度から法人税率等の引下げが行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の35.37%から、平成27年4月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異等については32.82%に、平成28年4月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異等については32.06%となります。

この税率変更により、繰延税金負債は341百万円減少し、その他有価証券評価差額金は467百万円増加し、法人税等調整額は126百万円増加しております。また、再評価に係る繰延税金負債は116百万円減少し、土地再評価差額金は同額増加しております。

## 【附属明細表】

## 【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	9,687	30	10	9,707	5,960	181	3,746
土地	8,726 〔2,839〕			8,726 〔2,839〕			8,726
リース資産	81	13		94	33	12	61
その他の有形 固定資産	2,446 〔85〕	24	480	1,990 〔85〕	1,686	60	304
有形固定資産計	20,941	68	491	20,518	7,681	254	12,837
無形固定資産							
ソフトウェア	376	44		420	260	80	160
リース資産	43			43	43	1	
その他の無形 固定資産	38			38	8	0	29
無形固定資産計	457	44		502	311	82	190

(注) 1. 「無形固定資産」については、当期首残高に前期末償却済の残高を含んでいません。

2. 当期首残高欄及び当期末残高欄における〔 〕内は、土地再評価差額（繰延税金負債控除前）の残高であります。

## 【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	4,571	4,691	0	4,570	4,691
一般貸倒引当金	1,580	1,602		1,580	1,602
個別貸倒引当金	2,990	3,089	0	2,990	3,089
退職給付引当金	117	198	27	109	179
睡眠預金払戻損失引当金	307	362	92	215	362
偶発損失引当金	123	121		123	121
計	5,120	5,374	119	5,019	5,355

(注) 1. 当期減少額(その他)欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

一般貸倒引当金 ..... 洗替による取崩額

個別貸倒引当金 ..... 主として洗替による取崩額

退職給付引当金 ..... 年金資産への拠出額及び前払年金費用への振替額

睡眠預金払戻損失引当金 ..... 洗替による取崩額

偶発損失引当金 ..... 洗替による取崩額

2. 退職給付引当金の当期首残高は、会計方針の変更による影響額を控除した後の金額を記載しております。

## 未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	224	776	224		776
未払法人税等	157	578	157		578
未払事業税	66	198	66		198

## (2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

## (3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	3月31日 9月30日
1単元の株式数	1,000株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 三井住友信託銀行本店ビル 三井住友信託銀行株式会社 本店
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 三井住友信託銀行本店ビル 三井住友信託銀行株式会社 本店
取次所	三井住友信託銀行株式会社 本店、全国各支店 日本証券代行株式会社 本店、全国各支店
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合の公告方法は、宮崎日日新聞に掲載する方法としております。 当行の公告掲載URLは次のとおりであります。 <a href="http://www.taiyobank.co.jp/">http://www.taiyobank.co.jp/</a>
株主に対する特典	ありません。

(注) 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

## 第7 【提出会社の参考情報】

### 1 【提出会社の親会社等の情報】

当行には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- |                                   |                 |                               |                           |
|-----------------------------------|-----------------|-------------------------------|---------------------------|
| (1) 有価証券報告書<br>及びその添付書類<br>並びに確認書 | 事業年度<br>(第113期) | 自 平成25年4月1日<br>至 平成26年3月31日   | 平成26年6月27日<br>関東財務局長に提出。  |
| (2) 内部統制報告書<br>及びその添付書類           | 事業年度<br>(第113期) | 自 平成25年4月1日<br>至 平成26年3月31日   | 平成26年6月27日<br>関東財務局長に提出。  |
| (3) 四半期報告書及び確認書                   |                 |                               |                           |
| 第114期第1四半期                        |                 | 自 平成26年4月1日<br>至 平成26年6月30日   | 平成26年8月13日<br>関東財務局長に提出。  |
| 第114期第2四半期                        |                 | 自 平成26年7月1日<br>至 平成26年9月30日   | 平成26年11月26日<br>関東財務局長に提出。 |
| 第114期第3四半期                        |                 | 自 平成26年10月1日<br>至 平成26年12月31日 | 平成27年2月13日<br>関東財務局長に提出。  |

### (4) 臨時報告書

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（定時株主総会において決議された決議事項）の規定に基づく臨時報告書であります。

平成26年6月27日 関東財務局長に提出

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成27年 6月26日

株式会社宮崎太陽銀行  
取締役会 御中

### 新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	堺	昌	義
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	藤	井	義 博
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	川	口	輝 朗

#### < 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社宮崎太陽銀行の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

#### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社宮崎太陽銀行及び連結子会社の平成27年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### < 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社宮崎太陽銀行の平成27年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、株式会社宮崎太陽銀行が平成27年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
  - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。





## 独立監査人の監査報告書

平成27年 6月26日

株式会社宮崎太陽銀行  
取締役会 御中

### 新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	堺	昌	義
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	藤	井	義 博
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	川	口	輝 朗

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社宮崎太陽銀行の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの第114期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

#### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社宮崎太陽銀行の平成27年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。